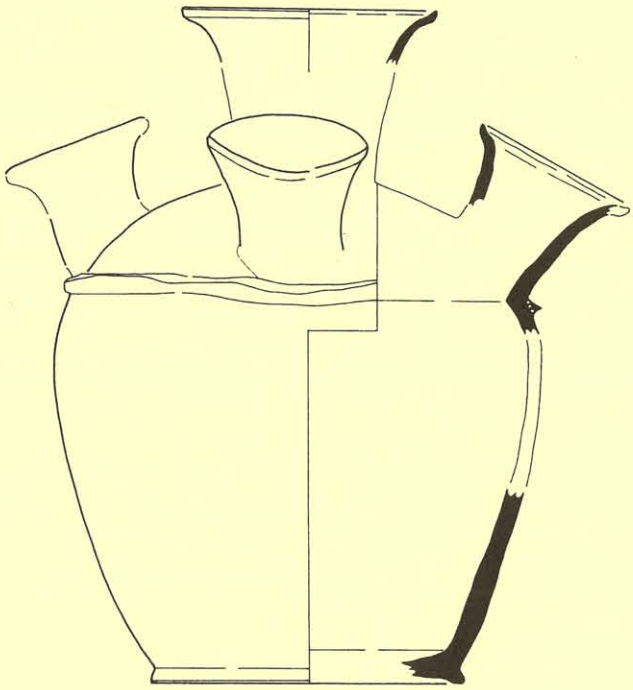
高松市埋蔵文化財調査報告 第５９集

高松市内遺跡発掘調査概報

-平成13年度国庫補助事業-



２００２年3月

高松市教育委員会

例 言

1．本書は，高松市教育委員会が平成13年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調事業の概要報告書である。

2．本書には平成13年度事業のうち，調査期間が平成13年4月から12月にかけて実施した公共工事に伴う確認調査３件，民間開発に伴う確認調査１件のほか，平成12年度事業として実施したが，概報印刷時期等の関係で昨年度の概報に未収録であった平成13年1月から3月にかけて実施した公共工事に伴う確認調査2件，平成12年度に史跡天然記念物屋島基礎調査事業として行った埋蔵文化財の確認調査についてそれぞれ収録した。

3．調査は，高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畑 聰，同 山元敏裕，同 大嶋和則，同 小川 賢が担当した。

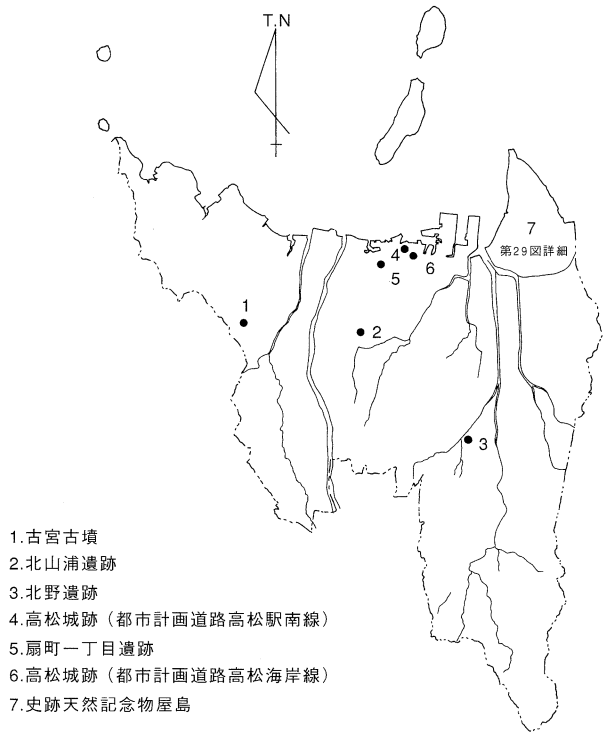
4．本書の執筆は調査担当者が行い，全体編集は山元が行った。

5．本書の挿図の一部に国土交通省国土地理院発行縮尺2万5千分の１の地形図を使用した。

6．調査の実施にあたっては，文化庁文化財調査官 臼杵 勲，香川県教育委員会文化行政課，京都大学大学院文学研究科教授 上原真人，屋島寺，四国森林管理局香川森林管理事務所，環境省自然環境局高松自然保護官事務所の指導・協力を得た。

目 次

第1章 高松市内遺跡発掘調査事業
平成12年度調査
古宮古墳…… 2
北山浦遺跡…… 5
平成13年度調査
北野遺跡…… 7
高松城跡（都市計画道路高松駅南線）……17
扇町一丁目遺跡（都市計画道路兵庫町西通町線）……18
高松城跡（都市計画道路高松海岸線）……20
第２章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業
平成12年度発掘調査 第1調査地点 ……22
平成12年度発掘調査 第2調査地点 ……27
平成12年度発掘調査 第3調査地点 ……30



第1図 平成12年度（一部）・平成13年度高松市内遺跡調査位置図

第１章　高松市内遺跡発掘調査事業

古宮古墳（ふるみやこふん）

１．調　査　地　高松市鬼無町山口
２．調 査 期 間　平成13年2月8日～14日
３．調査担当者　小川　賢
４．調査の原因　擁壁設置工事
５．調査の概要

古宮古墳は，勝賀山東麓に位置する神高谷の古墳群にあり，うち最大の横穴式石室をもつことで知られている。この横穴式石室は，昭和59年度に香川大学が学術調査を行っている。玄室は長さ6.4m，幅2.2m，高さ3.1mを測り，鉄地金銅貼鞍金具，ガラス玉や鉄器類等が副葬品としてある。

第２図 古宮古墳調査位置図

平成13年度，墳丘の南半部で巨石や土砂の崩落，流出の恐れがある部分に擁壁を設置することとなり，工事に先立ち確認調査を行った。トレンチを現況での墳丘南端部と西面に設置し，人力で掘削した。南側のトレンチ（1,2,4Tｒ）では，東西方向の撹乱が見られた。これにはビニールやプラスチック製品が含まれており，現況で見られる墳裾を巡る排水溝の一部であったと思われる。トレンチ（2,4Tｒ）の北壁では黒色土（⑥層）が，約2mにわたりやや窪み状に見られた。石室の正面にあたる位置関係から墓道と考えられたが，平面で確認できず現時点では性格不明である。西面のトレンチ（3Tｒ）周辺は崖となっており，石室の一部と思われる巨石が崩落しかかっていた。また墳丘に覆い茂る大木の根による撹乱が大きい。なお表採した遺物には，前回の調査で報告されているようなガラス丸玉（15），緑色の自然釉が付着した須恵器片（2）があり，本来石室内にあったものと考えられる。

６．まとめ

現状で石室は露出して見られ，①，②層が腐葉土や近世以降の遺物を包含していることからも，古墳の盛土はかなりの流出・撹乱があると言える。③，④層については，墳丘が遺存しているように思われるものの，版築といった工法は窺えなかった。出土遺物では，弥生時代中期頃とみられる土器片が多く，周辺部に当該期の遺跡が存在するものと推察される。

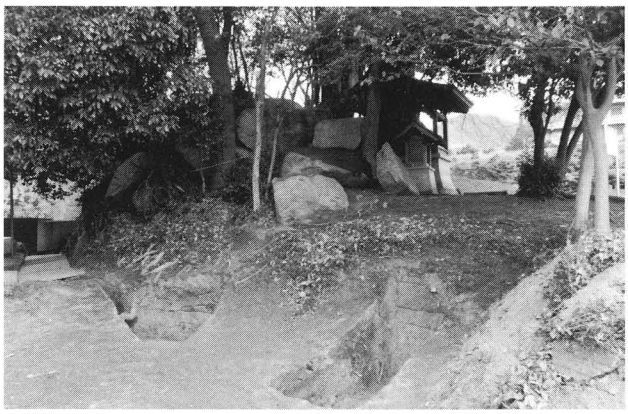
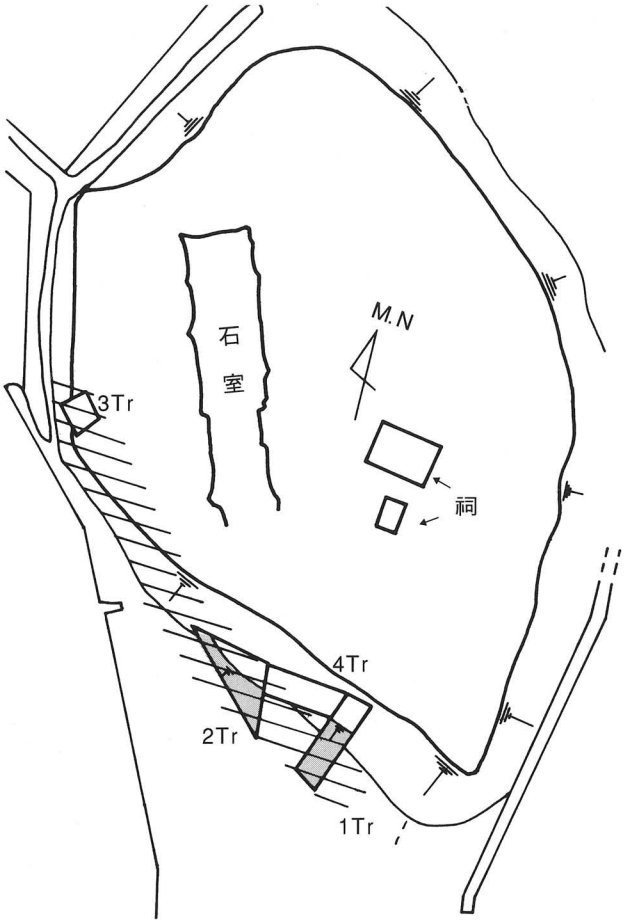


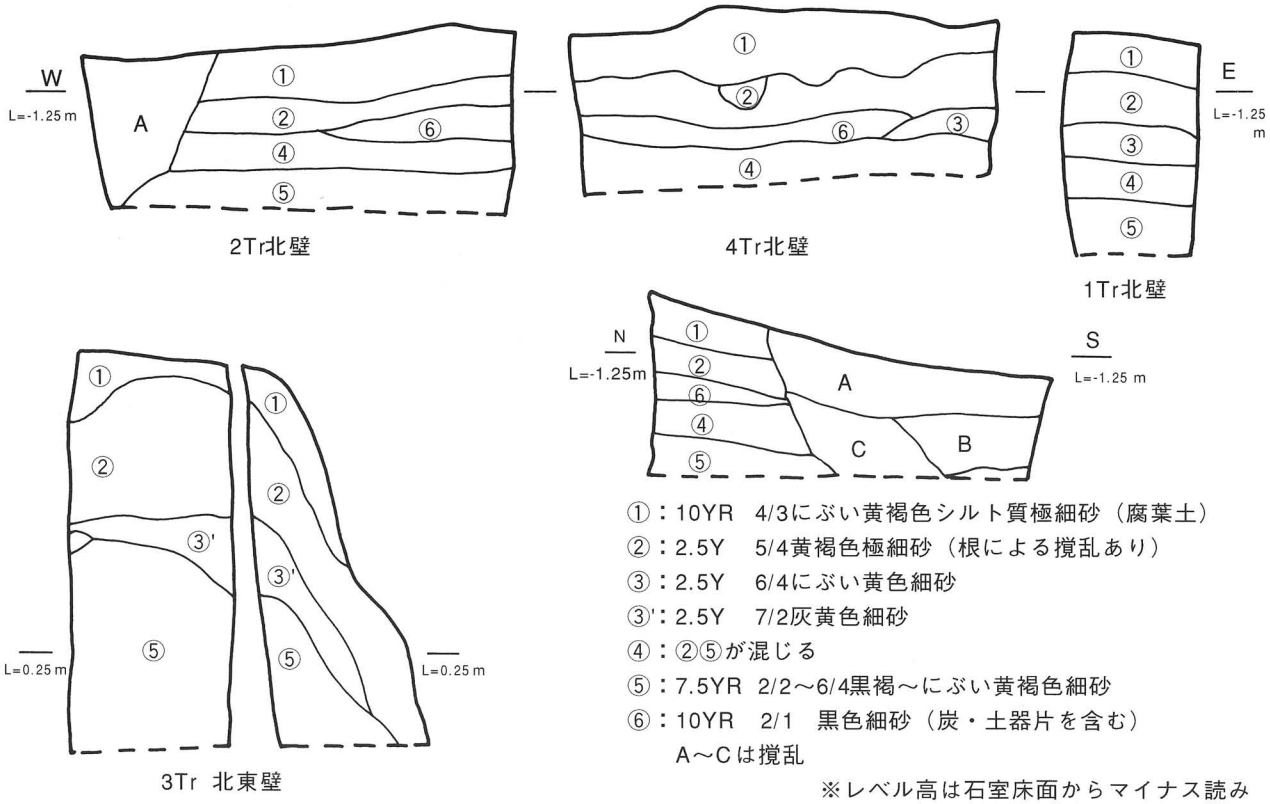
写真1 古宮古墳１,２Ｔｒ掘削状況

写真2　古宮古墳４Ｔｒ北壁土層堆積状況



斜線箇所は工事予定範図
網かけ箇所は撹乱範図

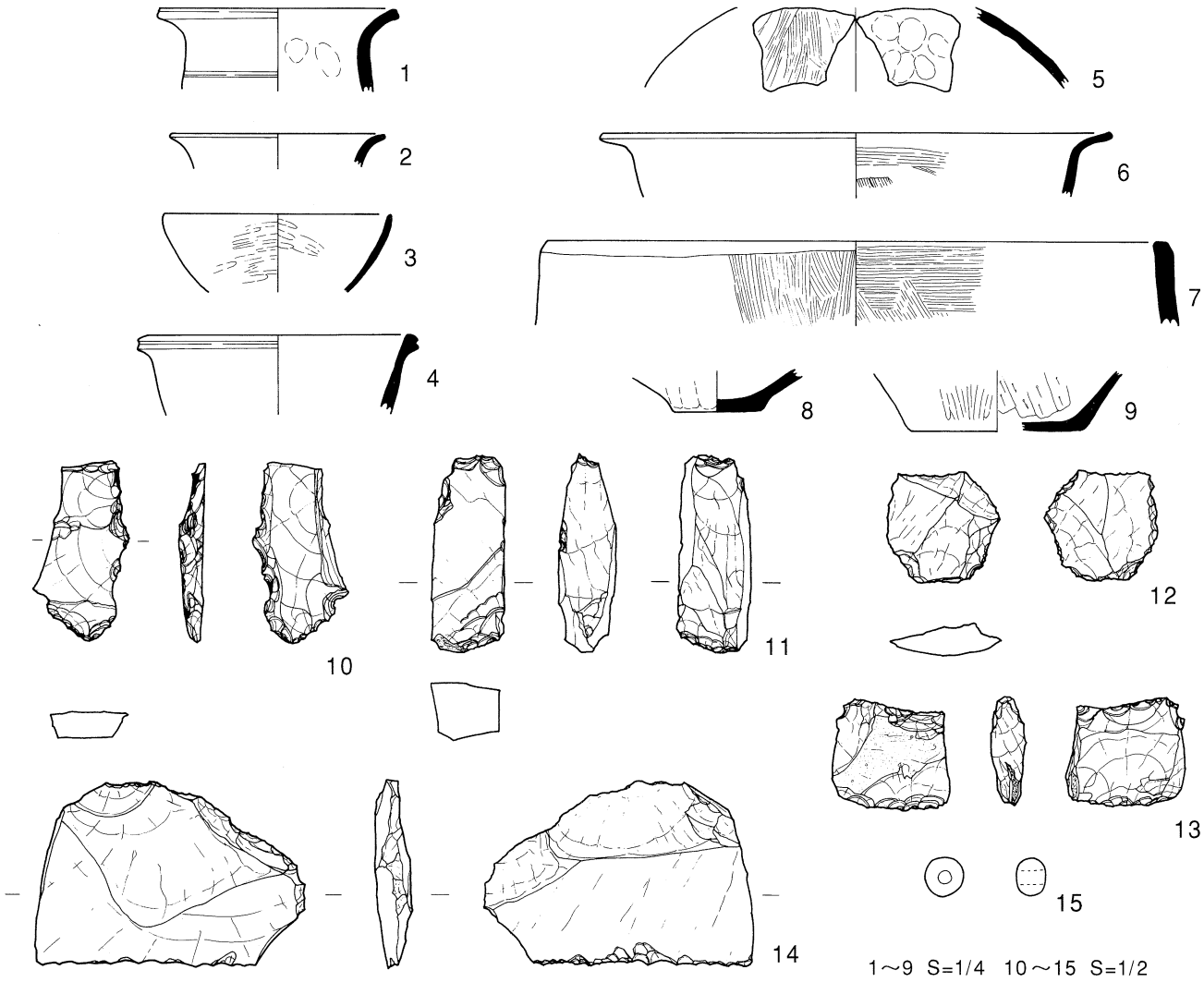
第3図　古宮古墳トレンチ配置図



①：10YR　4/3にぶい黄褐色シルト質極細砂（腐葉土）
②：2.5Y　5/4黄褐色極細砂（根による撹乱あり）
③：2.5Y　6/4にぶい黄色細砂
③'：2.5Y　7/2灰黄色細砂
④：②⑤が混じる
⑤：7.5YR　2/2～6/4黒褐～にぶい黄褐色細砂
⑥：10YR　2/1　黒色細砂（炭・土器片を含む）
A～Cは撹乱

※レベル高は石室床面からマイナス読み

第4図　トレンチ壁土層図（S=1/40）



第5図 古宮古墳試掘調査出土遺物図

No	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1	表採	弥生土器壺 口縁部	13.4		(4.8)	外面:口縁,頸部に凹線 内面:指頭圧痕	表:10YR5/3にぶい黄褐色 裏:10YR5/4にぶい黄褐色	1mm以下の長石,角閃石を含む	
2	表採	須恵器口縁部	12.0		(2.0)	外面:自然釉付着 内面:ナデ	表:釉10Y5/2オリーブ灰色 裏:7.5Y6/1灰色	1mm以下の石英,雲母を含む	
3	4Tr⑥層	黒色土器	13.0		(4.5)	外面:ヘラ磨き 内面:ヘラ磨き	表:N1.5/黒色 裏:N1.5/黒色	密	
4	①～②層	陶器口縁部	14.6		(4.6)	外面：ナデ 内面：ナデ	表:5YR5/1褐灰色 裏:5YR5/2灰褐色	密	
5	3Tr③層	弥生土器 壺胴部				外面：刷毛目 内面：指頭圧痕，ナデ	表:5YR6/6橙色 裏:5YR5/6明赤褐色	2mm以下の長石,雲母を含む	
6	表採	弥生土器 鉢口縁部	28.8		(3.7)	外面：ナデ 内面：刷毛目	表:10YR5/3にぶい黄褐色 裏:2.5Y4/1黄灰色	1mm以下の石英,角閃石を含む	
7	表採	土師質土器 口縁部	33.8		(4.8)	外面:刷毛目,ナデ 内面:刷毛目			
8	4Tr⑥層	弥生土器底部		5.0	(2.0)	外面:ナデ	表:7.5YR4/4褐色 裏:7.5YR4/4褐色	1mm以下の長石,角閃石を含む	
9	4Tr⑥層	弥生土器底部		9.6	(3.5)	外面:ヘラ磨き 内面:ヘラケズリ	表:10YR6/2灰黄褐色 裏:2.5Y5/1黄灰色	4mm以下の長石, 石英,角閃石を含む	底部黒斑
10	4Tr⑥層	スクレイパー	長さ5.2cm,幅2.7cm,厚さ0.7cm,重さ10.8g						サヌカイト製
11	4Tr⑥層	楔形石器	長さ5.6cm,幅2.1cm,厚さ1.6cm,重さ26.1g						サヌカイト製
12	4Tr⑥層	スクレイパー	長さ3.2cm,幅3.1cm,厚さ0.9cm,重さ8.2g						サヌカイト製
13	4Tr⑥層	楔形石器	長さ3.4cm,幅3.1cm,厚さ1.0cm,重さ11.0g						サヌカイト製
14	1Tr②層	スクレイパー	長さ3.4cm,幅3.1cm,厚さ1.0cm,重さ11.0g						サヌカイト製
15	表採	ガラス丸玉	径1.1cm，厚さ0.8cm				10G4/1暗緑灰色		

第1表 古宮古墳試掘調査出土遺物観察表

北山浦遺跡（きたやまうらいせき）

1．調　査　地　高松市西春日町北山浦
2．調 査 期 間　平成13年3月5日～12日
3．調査担当者　大嶋和則
4．調査の原因　都市計画道路木太鬼無線建設
5．調査の概要

調査地は高松平野の中央部に孤立丘として所在する石清尾山塊の南麓に位置する。都市計画道路木太鬼無線建設に先立ち，事業面積が広大なこと，周辺には石清尾山古墳群が所在し，事業予定地の東側には松並・中所遺跡が隣接することなどから事前に試掘調査を実施することとなった。平成12年度は西春日町の約6,000㎡を対象に実施した。

第6図 北山浦遺跡調査地位置図

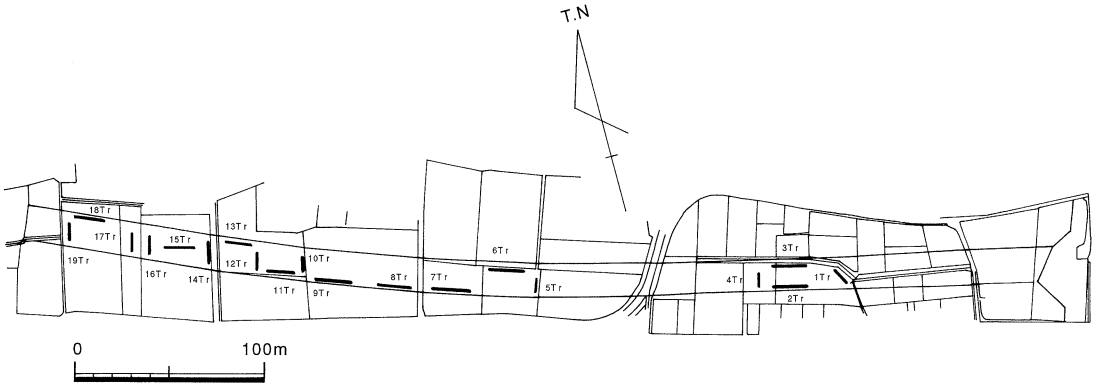
調査対象地内で19本のトレンチ調査を行った。各トレンチの概要は以下の表のとおりである。1～4Tr・13～18Trについては旧河道や微低地となっており，その埋土中から出土する遺物も少ない。また，微低地埋没後，わずかに近世の溝や柱穴が認められる程度であった。これらの地区に挟まれた調査対象地中央部の5～12Trは，微高地となっており柱穴や土坑・溝等を検出した。遺物は弥生土器や須恵器・土師器の他，石器なども出土した。一方，19Trでは丘陵斜面部になっており，遺構・遺物とも検出していない。

第2表 各トレンチの概要

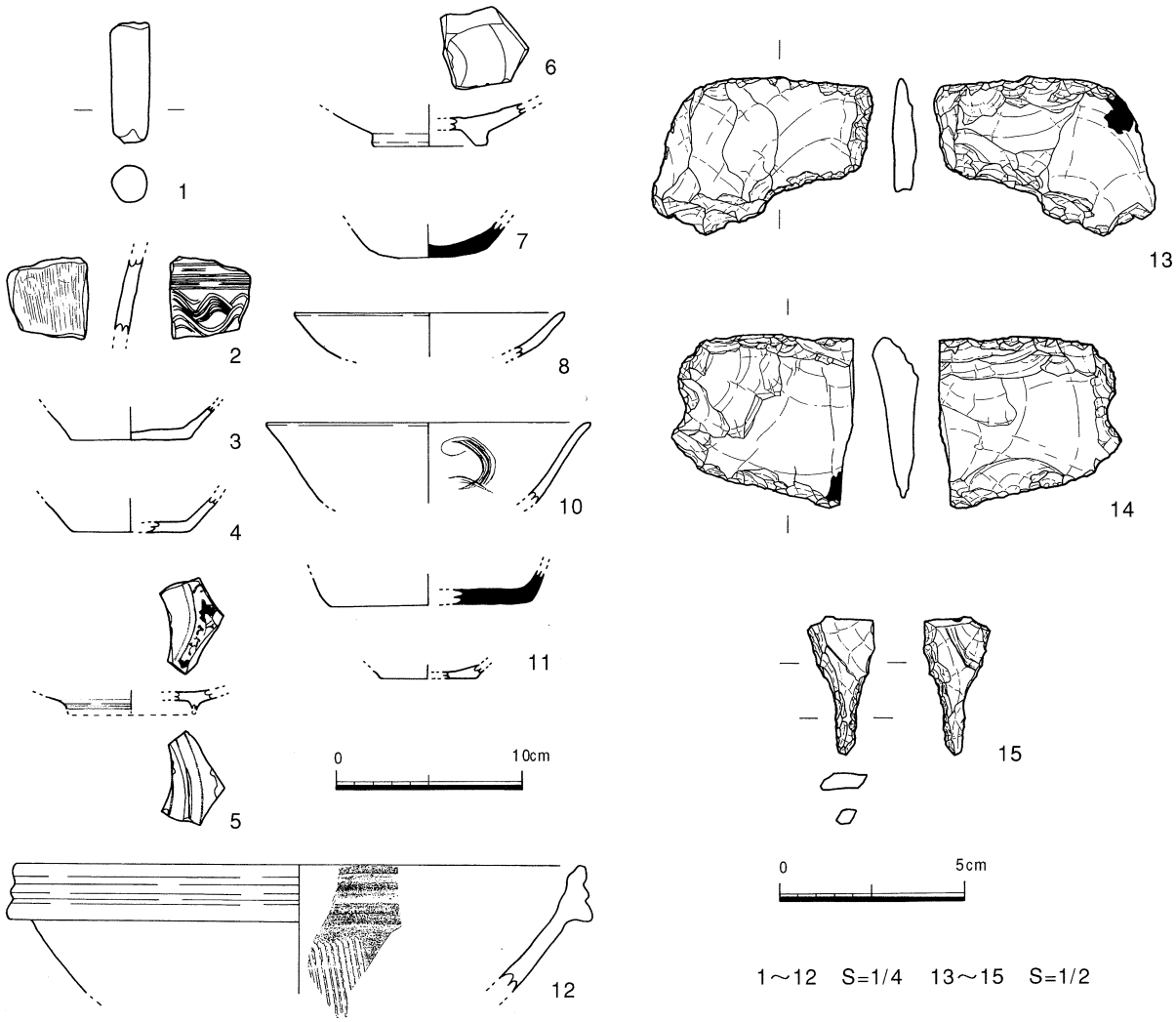
トレンチ	調査面積	積主な遺構	主な遺物	備　考
1Tr	11.5㎡	なし	なし	微低地で，遺構・遺物ともなし。
2Tr	15.3㎡	ピット･溝	弥生土器	微低地となっており，遺構・遺物とも希薄。
3Tr	16.4㎡	ピット･溝	弥生土器･土師器	
4Tr	8.0㎡	なし	弥生土器	トレンチ全体が旧河道。
5Tr	11.1㎡	ピット･土坑	弥生土器･土師器	微高地となっており、多数の遺構･遺物を検出。集落の可能性が高い。
6Tr	25.3㎡	ピット･土坑	弥生土器･石庖丁	
7Tr	24.2㎡	ピット･土坑・溝	弥生土器･石錐	
8Tr	17.2㎡	ピット･土坑・溝	土師器	
9Tr	20.3㎡	ピット･土坑	須恵器･土師器	
10Tr	11.2㎡	ピット･土坑	土師器	
11Tr	12.7㎡	ピット･土坑	須恵器･土師器	
12Tr	10.7㎡	ピット･土坑	弥生土器･土師器	
13Tr	11.1㎡	ピット	土師器	微高地だが遺構は希薄。
14Tr	10.8㎡	なし	なし	微低地で，遺構・遺物ともなし。
15Tr	17.6㎡	なし	なし	
16Tr	12.4㎡	なし	弥生土器･土師器	微高地だが，遺構なし。
17Tr	12.6㎡	なし	弥生土器･土師器	
18Tr	19.0㎡	なし	弥生土器	
19Tr	12.4㎡	なし	なし	丘陵部斜面で，遺構・遺物ともなし。

6．まとめ

微低地と旧河道に挟まれた5～12Trに遺構・遺物が集中している。特に５～７Trは弥生中期の遺物が出土しており，当該期の集落と考えられる。また，8～12Trについては土師器や須恵器が出土しており，調査地北方の北山浦古墳群との関係が指摘できる。また，龍泉窯系青磁碗をはじめとする中世の遺物も数多く見られ，さらに調査地の西には五輪塔が見られることから，中世の遺構も存在する可能性は高い。



第7図　トレンチ配置図



第8図　北山浦遺跡出土遺物実測図

北野遺跡（きたのいせき）

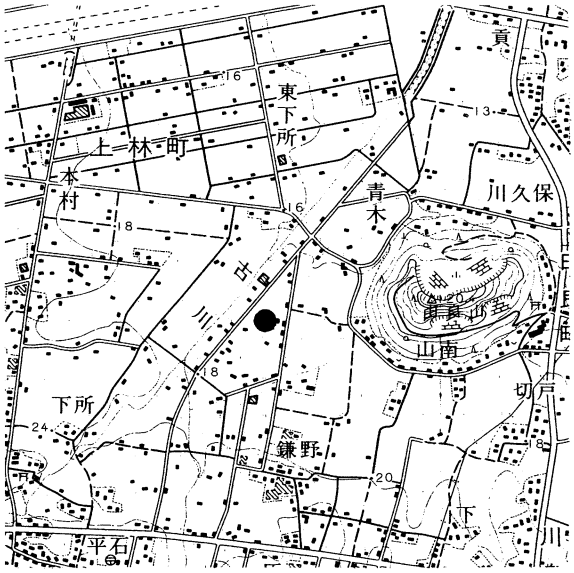
1．調　査　地　高松市三谷町
2．調 査 期 間　平成13年9月12～19日
3．調査担当者　川畑聰，中西克也
4．調査の原因　個人住宅造成
5．調査の成果

(1) 調査の概要と基本層序

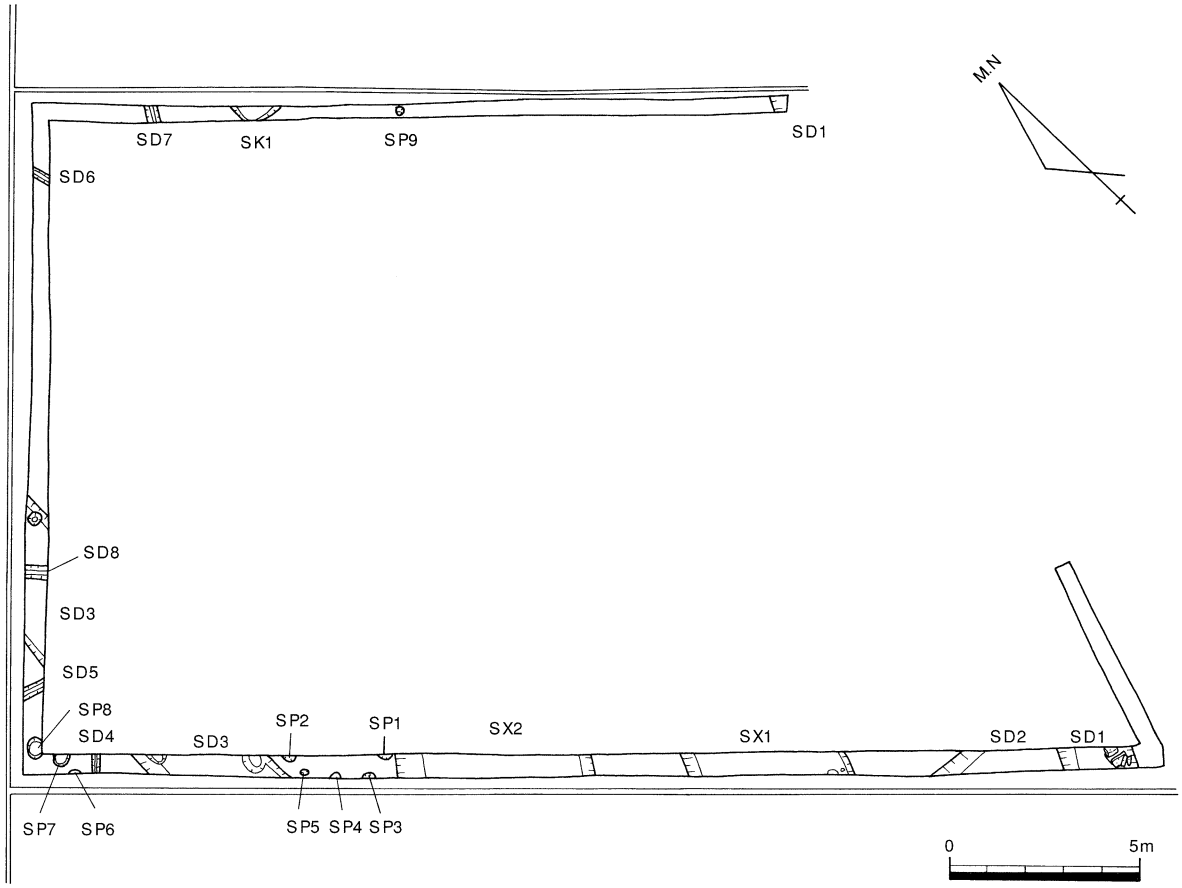
調査は，掘削工事により地中の遺構が影響を受ける擁壁部分を対象とした。

調査区は逆コ字形を呈し，北側の長さは19.3m，西側は17.8m，南側は29.7mを測る。幅は0.5mである。

調査区全域の層序は4層に分けられ，現水田耕作土の下に江戸時代の水田耕作土である灰黄色シルト質極細砂と灰白色シルト質極細砂が堆積し，地山が緩やかに低くなる調査区の南東部では，褐灰色シルト質極細砂が堆積する。地山は砂礫層であり，そのレベルは東側から西側に向かって緩やかに高くなる。



第9図　北野遺跡調査地位置図



第10図 遺構配置図（S=1/200）

(2) 弥生時代の遺構･遺物

ＳＤ２　（第11・12図）

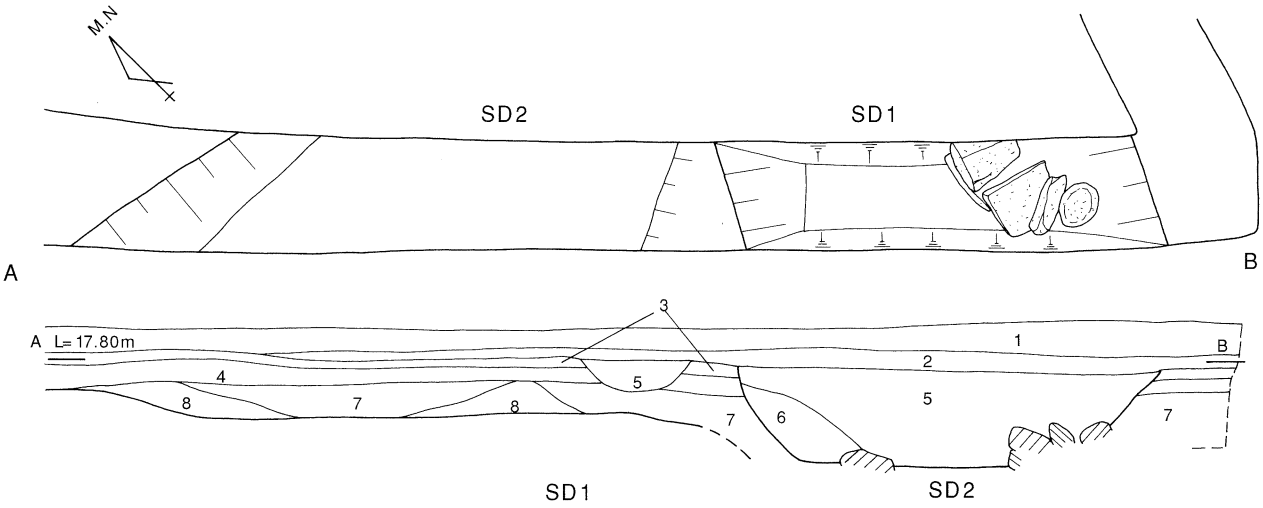
調査区南東隅で検出された溝であり，ＳＤ１に切られている。確認面のレベルは標高17.60ｍである。溝の幅･深さの正確な数値は不明であるが，検出された範囲から判断すると幅は5.50ｍ以上である。溝の方向は東西である。溝の掘り込みは非常に緩やかな傾斜で下がり，広い平坦面を有し，中央付近では急傾斜で落ち込んでいる。しかし，その部分にＳＤ１が検出されたため，調査することはできなかった。確認面から平坦面までの深さは0.16ｍである。確認された埋土は褐灰色シルト質細～粗砂，灰褐色シルト質粗砂の2層のみである。

出土遺物は，弥生土器壷（３・５），同甕（４），同底部（６・７）であり，弥生時代前期末である。

３は，口縁端部に沈線を巡らし，刻目が施される。色調は外面灰白色，内面浅黄橙色を呈し，胎土に粗砂を含む。５は，外面に篦ミガキ，内面にナデが施され，沈線紋を巡らす。外面の色調は鈍い橙色，内面は浅黄橙色を呈し，胎土に微～細砂を含む。

４は，口縁端部に刻目を施し，内外面ともに灰白色を呈し，粗砂を含む。

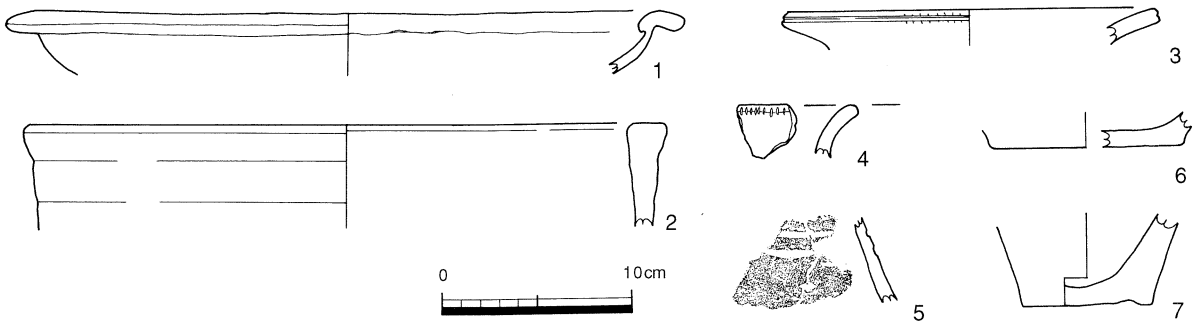
６の外面は鈍い橙色，内面は灰白色を呈し，胎土に微～細砂を含む。７は，外面ナデ，内面篦ケズリが施され，外面は浅黄橙色，内面褐灰色を呈する。胎土は細礫を含む。



1　現水田耕作土
2　灰黄色シルト質極細砂（2.5Y7/2）
3　灰白色シルト質極細砂（10YR8/1 上面にFe集積）
4　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR6/1）
5　灰白色シルト質極細砂（2.5Y8/1）
6　砂礫層
7　褐灰色シルト質極細～粗砂（5YR4/1）
8　灰褐色シルト質粗砂（7.5YR5/2）

0　1m

第11図 SD1・2平・断面図（S=1/40）



第12図 SD1・2 出土遺物実測図（S=1/4）

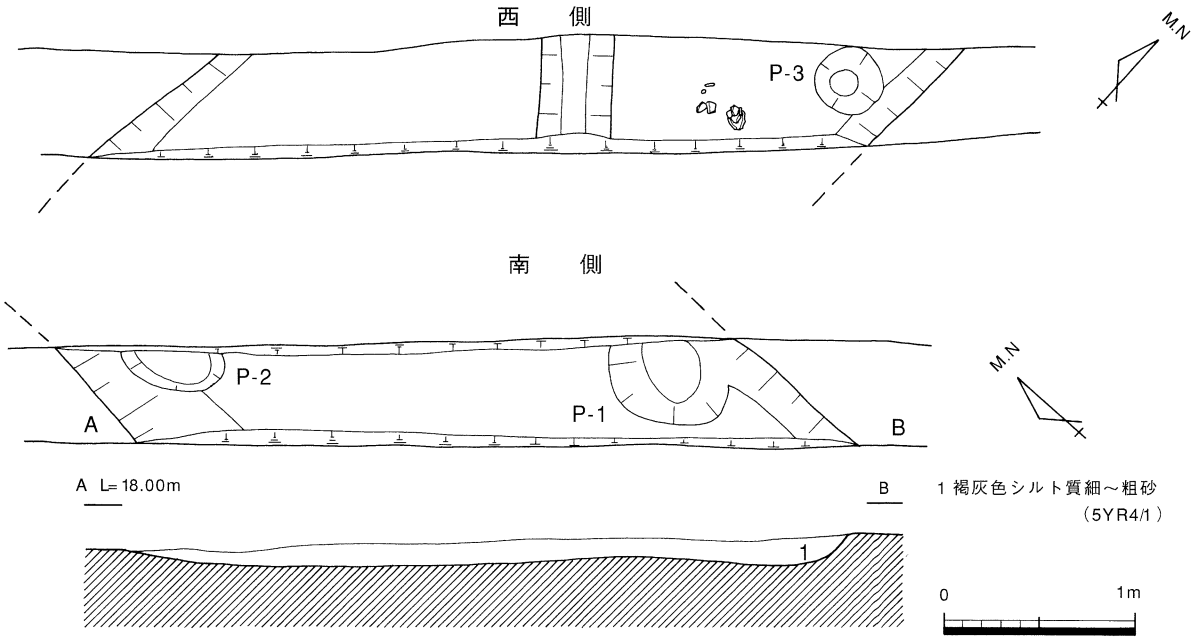
ＳＤ３　（第13･14図）

調査区南西隅において検出された溝であり，ＳＤ８を切っている。確認面のレベルは標高17.76mである。溝は南北方向に延び，幅は2.60m，確認面からの深さは0.15mを測る。溝の断面は浅い逆台形を呈し，底面は中央部が若干下がるがほぼ平坦である。南側では底面にＰ－１，Ｐ－２の２個のピットが検出され，西側ではＰ－３が検出された。Ｐ－１は円形を呈し，直径0.66m，深さ0.07mを測る。Ｐ－２の平面形は楕円形を呈すると考えられ，検出された範囲での直径は0.50mを測る。深さは0.02mである。Ｐ－３の平面形は円形を呈し，直径は0.35m，深さは0.14mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂の単一層である。

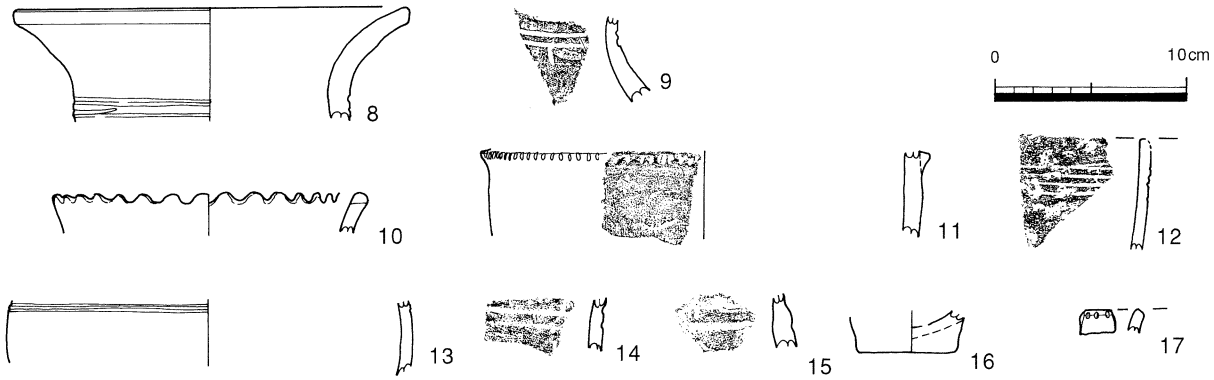
出土遺物は，弥生土器壷（８．９），同甕（10～15），同底部（16），その他の弥生土器である。これらの土器の時期は弥生時代前期末である。

８は，広口壷であり，頸部外面に箆描沈線を巡らしている。外面は丁寧なナデ，内面はナデが施されている。色調は，外面橙色，内面浅黄橙色を呈し，胎土に石英や長石の微～粗砂を含む。９は，頸部外面に箆描沈線を巡らし，外面の調整は箆ミガキ，内面はナデが施される。外面の色調は橙色，内面は鈍い橙色を呈し，胎土は細～粗砂を含む。

10は，波状口縁の甕であり，内外面ともナデが施される。外面の色調は浅黄橙色，内面は橙色を呈



第13図 SD3平・断面図（S=1/40）



第14図 SD3・8出土遺物実測図（S=1/4）

し，胎土に微～細砂を含む。11は，口縁端部を欠損し，刻目突帯を巡らす。内外面の調整はナデが施され，外面の色調は褐灰色，内面は浅黄橙色を呈する。胎土には石英や長石の微～粗砂を含む。12は口縁端部の突帯を欠損する。外面に4条の箆描沈線が施され，内面の調整はナデが施される。色調は灰白色を呈し，胎土は微～粗砂を含む。13は，外面に2条の箆描沈線が巡り，調整は磨滅のため不明である。外面の色調は浅黄橙色，内面は褐灰色を呈し，胎土に細～粗砂を含む。14・15は，箆描沈線を有し，外面の色調は明褐色，内面は鈍い橙色を呈する。胎土は微～粗砂を含む。

16は，接合痕が明確に残り，橙色を呈する。胎土に粗砂～細礫を多量に含む。

ＳＤ４

調査区の南西隅において検出された溝であり，ＳＤ３の西側に位置する。確認面のレベルは標高17.76mである。溝は北東－南西方向に延びる。溝の幅は0.20～0.30m，確認面からの深さは0.10mを測り，断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂の単一層である。

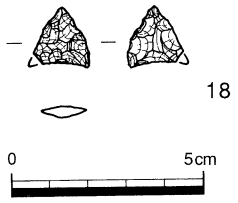
ＳＤ８　（第14図）

調査区の南西隅において検出された溝であり，ＳＤ３に切られる。確認面はＳＤ３の底面であり，レベルは標高17.70mである。溝は北西－南東方向に延びる。溝の幅は0.38m，確認面からの深さは0.13mを測り，断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂の単一層である。
出土遺物は，口縁端部に刻目文を有する弥生土器甕（17）である。

ＳＰ１　（第15図）

調査区南側の中央やや西寄りにおいて検出されたピットであり，南半分のみ検出された。確認面のレベルは標高17.70mである。平面形は円形を呈すると考えられ，直径は0.40m，深さは0.10mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂の単一層である。

出土遺物は，細かい調整の施された凹基式石鏃（18）である。



第15図　SP1出土遺物実測図
（S=1/2）

ＳＰ２

調査区南側の中央西寄りにおいて検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.73mである。平面形は円形を呈し，直径は0.34m，深さは0.06mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂である。

ＳＰ３

調査区南側の中央やや西寄りで検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.73mである。平面形は円形を呈し，直径は0.30m，深さは0.10mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂である。

ＳＰ４

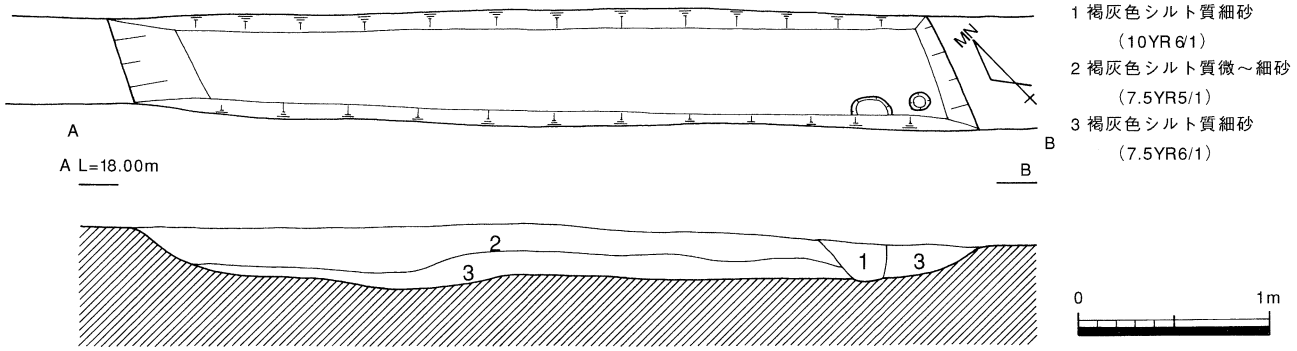
調査区南側の中央やや西寄りで検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.73mである。平面形は円形を呈し，直径は0.42m，深さは0.08mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂である。

ＳＰ５

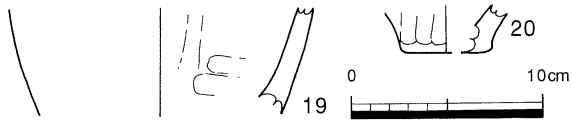
調査区南側の中央西寄りにおいて検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.73mである。平面形は円形を呈し，直径は0.22m，深さは0.05mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂である。

ＳＰ６

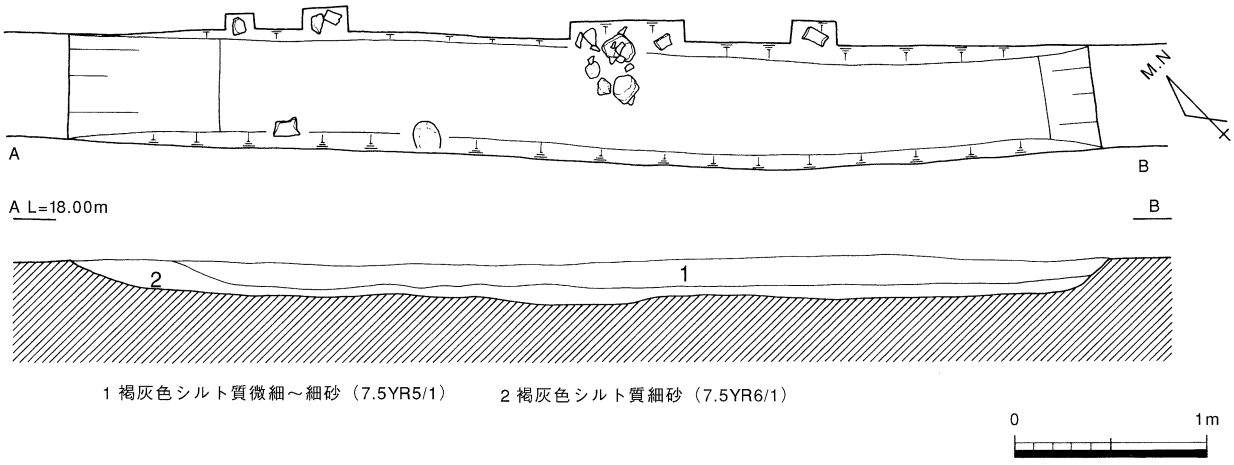
調査区南西隅において検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.76mである。平面形は円形を呈し，直径は0.34m，深さは0.07mを測る。埋土は褐灰色シルト質細～粗砂である。



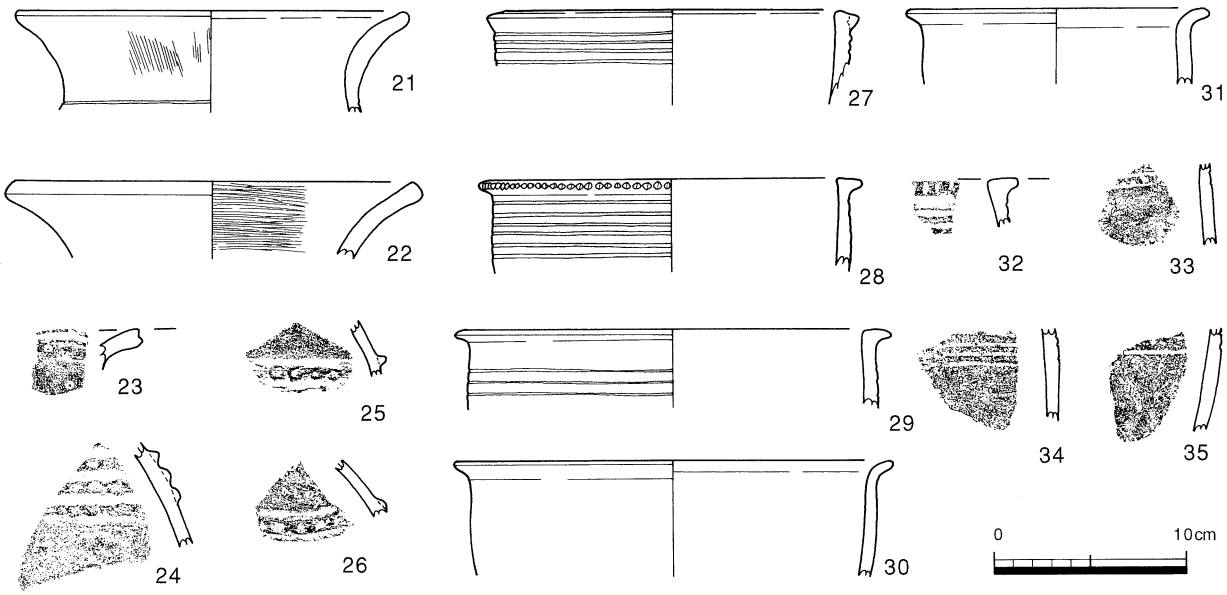
第16図　SX1平・断面図（S=1/40）



第17図 SX1出土遺物実測図（S=1/4）



第18図 SX2平・断面図（S=1/40）



第19図 SX2出土遺物実測図（1）（S=1/4）

ＳＰ７

調査区南西隅において検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.76ｍである。平面形は円形を呈し，直径は0.40ｍ，深さは0.04ｍを測る。埋土は褐灰色シルト質粗砂である。

ＳＰ８

調査区南西隅において検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.81ｍである。平面形は楕円形を呈し，長径は0.60ｍ，深さは0.06ｍを測る。埋土は褐灰色シルト質粗砂である。

ＳＸ１　（第16・17図）

調査区南側の中央やや東寄りにおいて検出された落ち込みである。確認面のレベルは標高17.66ｍである。調査範囲が狭いため全体の平面形・規模は不明であるが，東西方向の幅は4.35ｍを測る。確認面からの深さは0.21ｍで，東側の掘り込みはやや急傾斜であるが，西側は緩やかな傾斜である。底面は，周辺部と比較して中央部が0.06ｍ低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細～細砂と褐灰色シルト質細砂の2層である。東壁近くに円形のピットが2個検出されるが，土層断面の観察によれば確認面からの掘り込みであり，ＳＸ１より新しい時期の遺構である。

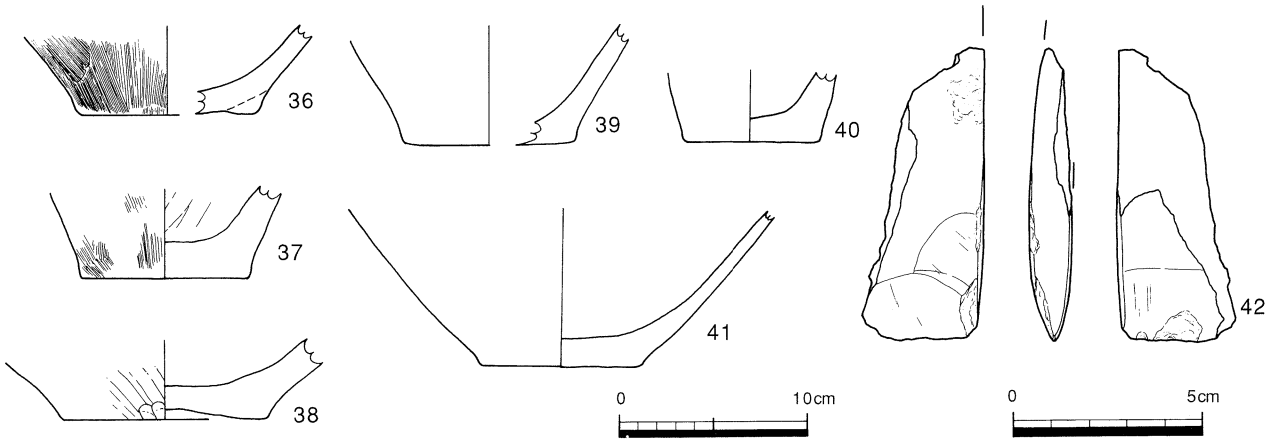
出土遺物は，弥生土器甕（19．20），その他の弥生土器片である。土器の時期は弥生時代前期末である。19は，外面ナデ，内面板ナデが施され，外面の色調は鈍い橙色，内面は橙色である。胎土は石英・長石の細～粗砂を含む。20は，外面板ナデが施され，外面の色調は橙色，内面は灰白色を呈する。胎土は石英・長石の細～粗砂を含む。

ＳＸ２　（第18～20図）

調査区南側の中央において検出された落ち込みである。確認面のレベルは東側で標高17.66ｍ，西側で17.74ｍである。調査範囲が狭いため全体の平面形・規模は不明であるが，東西方向の幅は5.35ｍを測る。確認面からの深さは0.10～0.18ｍで，東側の掘り込みはやや急傾斜であるが，西側は緩やかな傾斜である。底面は，西側が高くなるがほぼ平坦である。埋土は上層の褐灰色シルト質極細～細砂と下層の褐灰色シルト質細砂の2層であり，ＳＸ１と同一土層である。埋土中には炭化材が少量検出された。

出土遺物は，弥生土器壷（21～26），同甕（27～35），同底部（36～41），磨製石斧（42），その他の弥生土器片と多量のサヌカイトのチップである。土器の時期は弥生時代前期末である。

21は，口縁部と胴部との境に箆描沈線を施す。外面は粗い刷毛目，内面はナデが施される。外面の色調は橙色，内面は鈍い橙色を呈し，胎土には石英・長石の粗砂～細礫を含む。22は，内外面に丁寧な箆ミガキが施されるが，外面は磨滅が著しい。色調は内外面ともに黒褐色を呈し，胎土には石英・長



第20図 SX2出土遺物実測図（2）（S=1/2,1/4）

石の粗砂～細礫を含む。23は，口縁端部に沈線を巡らす。色調は内外面ともに淡黄色を呈し，胎土には石英・長石の細～粗砂を含む。24は，胴部片であり，指頭圧痕文を施した貼付突帯が3条残存する。外面の色調は鈍い黄橙色，内面は浅橙色を呈し，胎土には石英・長石の細～粗砂を含む。25・26は，指頭圧痕文を施した貼付突帯が見られる。25の色調は黒褐色，26の外面は灰白色，内面は褐灰色を呈し，胎土は石英・長石の微～細砂を含む。

27～29・32は「逆L字形」口縁を有し，胴部外面に箆描沈線が見られる。30・31は「如意状」口縁を有する。27の外面の色調は鈍い橙色，内面は鈍い黄橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。28は，口縁端部に刻目を施し，外面の色調は淡赤橙色，内面は灰黄褐色を呈し，胎土には微～細砂と細礫を多量に含む。29の外面色調は黒褐色，内面は橙色を呈し，胎土には細礫を多量に含む。30の色調は橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。31の色調は鈍い黄橙色を呈し，胎土には細礫を多量に含む。32は，口縁端部に刻目を施し，色調は橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。33は，2条沈線間に円形刺突文が見られ，外面の色調は鈍い橙色，内面は灰白色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。34は，沈線が施され，外面の色調は黒色，内面は橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。35の色調は鈍い黄橙色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。

36・37は，外面に刷毛目が施される。36の外面色調は黒褐色，内面は淡橙色を呈し，細礫を多量に含む。37の外面色調は赤褐色，内面は黒褐色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。38の外面色調は鈍い橙色，内面は灰白色を呈し，細礫を多量に含む。39の外面色調は浅黄橙色，内面は灰白色を呈し，胎土には細砂～細礫を多量に含む。40の外面色調は赤橙色，内面は鈍い赤橙色を呈し，細礫を多量に含む。41の外面色調は灰白色，内面は灰褐色を呈し，胎土には粗砂～細礫を多量に含む。

(3) 江戸時代の遺構・遺物

ＳＤ１　（第3・4図）

調査区の南東隅と北東隅において検出された溝であり，ＳＤ２を切っている。ただし，北東隅では溝の西岸上面を確認しただけである。確認面のレベルは標高17.76mである。溝の方向はＮ－25°－Ｅであり，幅は2.20m，確認面からの深さは0.50mを測る。溝の断面は逆台形を呈し，東岸は石を積み重ねて擁壁としている。埋土は2層に分けられるが，灰白色シルト質極細砂が大部分を占め，砂礫は西岸近くに堆積するのみである。

出土遺物は，土師質土器焙烙（１），同甕（２），陶磁器片，瓦である。

1は，口径36㎝を測り，外面に指頭圧痕が見られる。外面の色調は褐灰色，内面は灰色を呈する。2は，口径33㎝を測り，外面の色調は浅黄橙色，内面は褐灰色を呈する。

ＳＤ５

調査区の南西隅において検出された溝である。確認面のレベルは標高17.80mである。溝の方向はほぼ東西である。溝の幅は0.30m，深さは0.13mを測り，断面はＵ字形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＤ６

調査区の北西隅において検出された溝である。確認面のレベルは標高17.73mである。溝の方向はほぼ北西－南東である。溝の幅は0.20m，深さは0.04mを測り，断面は浅いＵ字形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＤ７

調査区の北西隅において検出された溝である。確認面のレベルは標高17.70mである。溝の方向はほぼ北東－南西である。溝の幅は0.30m，深さは0.11mを測り，断面はＵ字形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＫ１

調査区の北側の中央西寄りにおいて検出された土坑である。確認面のレベルは標高17.66mである。調査範囲が狭いため土坑の平面形・規模は不明であり，深さは0.07mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

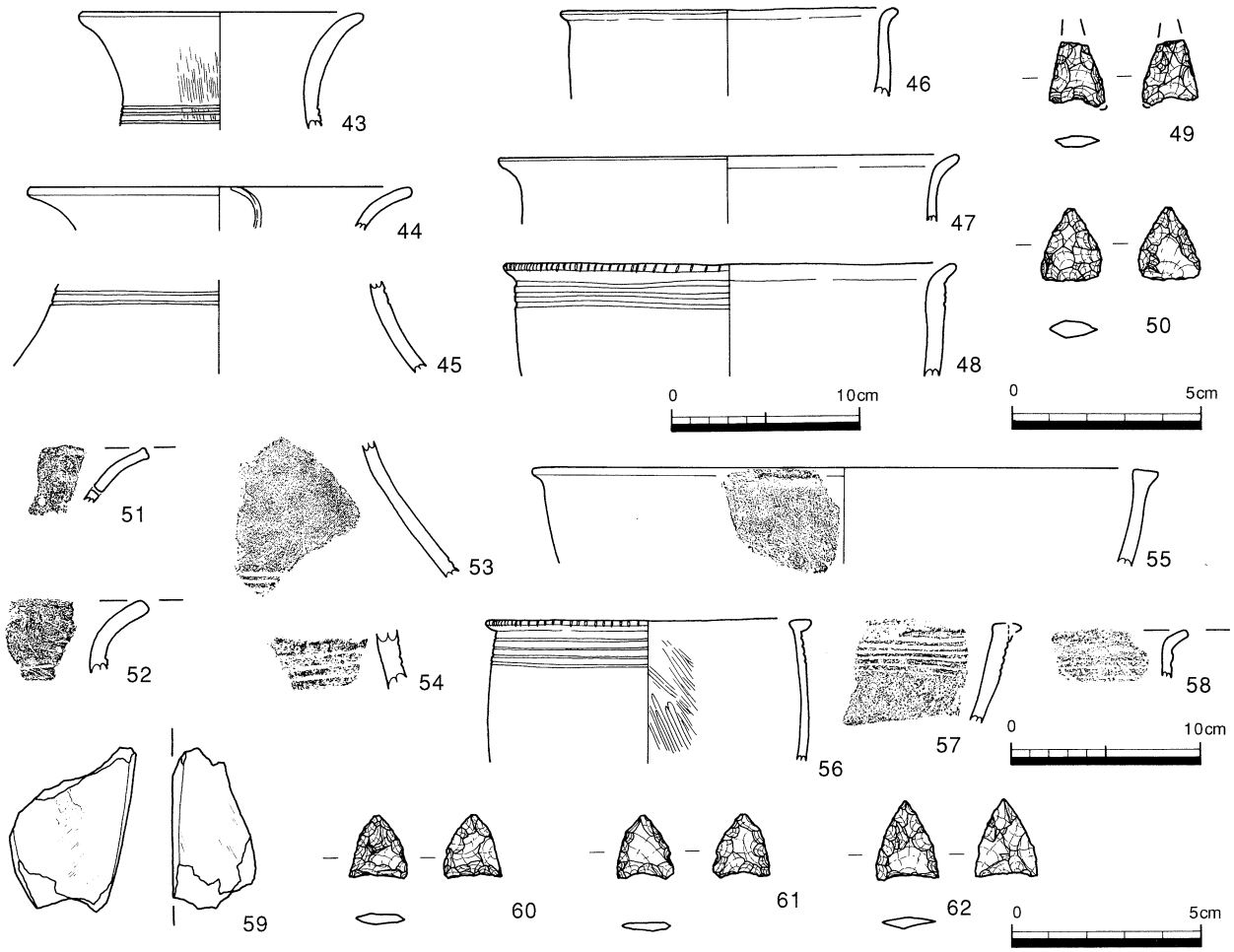
ＳＰ９

調査区の北側中央において検出されたピットである。確認面のレベルは標高17.76mである。平面形は円形を呈し，直径は0.31m，深さは0.26mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層であり，全く締まっていない。

(4) 包含層出土遺物　（第13図）

43～50は，第2・3層より出土した遺物であり，弥生土器壷（43～45），同甕（46～48），石鏃（49・50）である。51～62は，第4層ならびに確認面上面より出土した遺物であり，弥生土器壷（51～54），同甕（55～58），磨製石斧（59），石鏃（60～62）である。

43は，外面に細かい刷毛目が施され，口縁部と胴部との境に箆描沈線を巡らす。外面の色調は灰白色，内面は浅黄橙色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。44は，内面に粘土紐を貼り付けた文様が見られる。外面の色調は明褐灰色，内面は黄橙色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。45は，2条の箆描沈線が残存し，外面の色調は鈍い橙色，内面は灰白色を呈し，胎土には微～細砂を含む。



第21図 包含層出土遺物実測図 （S=1/2,1/4）

46～48は「如意状」口縁である。46の外面色調は鈍い黄橙色，内面は灰白色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。47の外面色調は灰白色，内面は浅黄橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。48は，口縁端部に刻目を施し，胴部外面に3条の箆描沈線を巡らす。色調は鈍い黄橙色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。

49は凹基式石鏃，50は平基式石鏃であり，全面に細かい加工が行われる。両方ともサヌカイト製である。

51は，円孔2個を有し，外面の色調は鈍い橙色，内面は橙色を呈し，胎土には微～細砂を含む。52は，2条の箆描沈線が残存し，外面の色調は鈍い橙色，内面は浅黄橙色を呈し，胎土には微～細砂を含む。53は，内外面に箆ミガキが施され，外面の色調は鈍い橙色，内面は褐灰色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。54は，3条の沈線が残存し，色調は褐灰色，胎土には粗砂～細礫を含む。

55～57は「逆Ｌ字形」口縁，58は「如意状」口縁である。55の外面は刷毛目が施され，外面の色調は灰黄褐色，内面は灰褐色を呈し，胎土には細～粗砂を含む。56は，内面に箆ミガキが施され，口縁端部には刻目が見られ，胴部外面には4条の箆描沈線が巡る。外面の色調は明褐灰色，内面は鈍い褐色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。57は，６条の箆描沈線が巡り，外面の色調は鈍い橙色，内面は橙色を呈し，胎土には微～細砂を含む。58は，沈線を有し，外面の色調は灰白色，内面は浅黄橙色を呈し，胎土には粗砂～細礫を含む。

59は，蛇紋岩製の磨製石斧である。60～62は，サヌカイト製の小型凹基式石鏃で，全面に細かい加工が行われる。

６．まとめ

検出された遺構は，溝８条（ＳＤ１～８），ピット９基（ＳＰ１～９），土坑１基（ＳＫ１），性格不明遺構２基（ＳＸ１・２）である。その時期は，弥生時代前期末と江戸時代の２時期に分けられる。

弥生時代前期末の遺構は，ＳＤ２～４・８，ＳＰ１～８，ＳＸ１・２があり，江戸時代はＳＤ１・５～７，ＳＫ１，ＳＰ９である。これらの遺構の中で注目すべきものとしては，ＳＤ１とＳＸ１・２が挙げられる。

ＳＤ１はＮ－25°－Ｅの方向に延びる溝であり，昭和19年の軍用空港として接収に伴う大規模な土地変革より以前の条里地割に基づく溝である。本遺跡は調査面積が非常に狭く，土地区画について論じることは不可能である。しかし，（財）香川県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した北野遺跡において，ＳＤ１が南北方向に延びていることを確認した。このような溝の事例を蓄積することにより，昭和19年以前の土地区画の復元が可能となる。

（財）香川県埋蔵文化財調査センター調査の北野遺跡の中で本遺跡と東隣する部分では，弥生時代前期の遺構として彎曲する溝・旧河道が検出されている。この溝は旧河道の西岸に検出され，平面形は東側に彎曲している。溝はＶ字状の断面であり，上層には多量の土器が出土し，環濠の可能性も考えられている。溝の北端は本遺跡の南東隅にあたっており，この溝と本遺跡のＳＤ2は同一の遺構と考えられる。（財）香川県埋蔵文化財調査センターの北野遺跡は，微高地の縁辺部の調査であるのに対して，本遺跡は，微高地の中央に近い部分の調査である。そこで問題となるのがＳＸ１・２である。ＳＸ１は幅4.35m，深さ0.21m，ＳＸ２は幅5.35m，深さ0.18mを測るが，調査面積が非常に狭いためその平面形・性格は不明である。しかし，多量の土器やサヌカイトのチップ・炭化材が出土したことから，これらの遺構は竪穴住居である可能性が高いと思われる。周囲には溝と柱穴が検出されており，本遺跡は微高地上に位置する集落域としての性格を有すると考えられる。

写真3　遺跡遠景

写真4　SD1

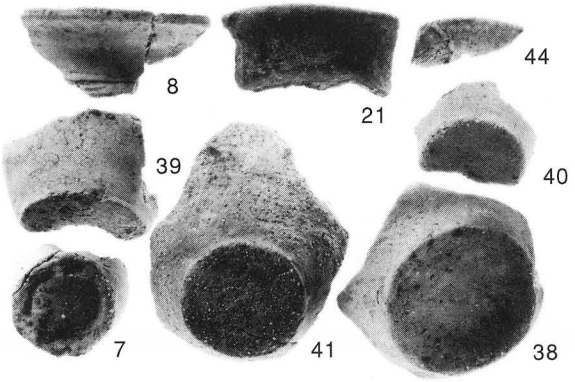
写真5　SD3（西側）

写真6　SD3（南側）

写真7　SD1・2

写真8　SX1

写真9　SX2



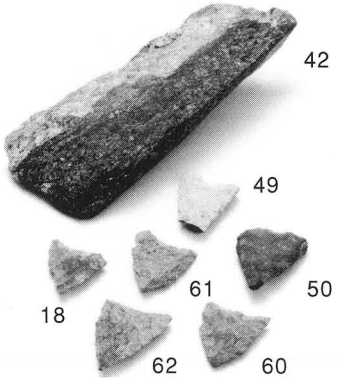


写真10
出土遺物

高松城跡（たかまつじょうあと）（都市計画道路高松駅南線）

1．調　査　地　高松市寿町一丁目

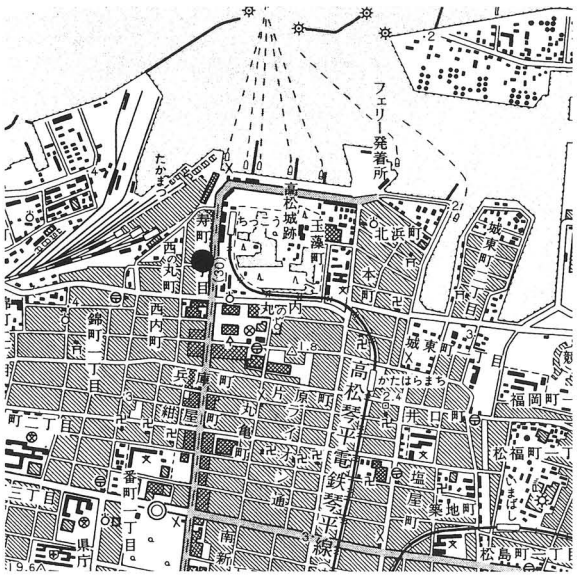
2．調 査 期 間　平成13年10月９日～10日

3．調査担当者　川畑　聰・中西克也

4．調査の原因　都市計画道路高松駅南線建設

5．調査結果の概要

高松城は，天正15年(1587)に入封した生駒親正によって翌年より築城され，寛永19年(1642)に高松藩主となった松平家が明治維新を迎えるまで藩の居城であった。今回，調査の対象となった都市計画道路高松駅南線は，高松城の西ノ丸にあたり，城を囲む三重の堀のうち，中堀とその内側の屋敷地に該当する。



第22図　調査地位置図

確認調査は，屋敷推定地であり，現在駐輪場となっている広場において，東西18mのトレンチを２本設定して実施した。中堀に該当する範囲は，住宅等の立ち退きが終わっておらず，確認調査は実施できなかった。

南側に位置する第１トレンチにおいて，江戸時代に属する2面の遺構面を確認し，各遺構面において土坑を検出した。地表より約1.1m以下は砂層となっており，無遺物層である。南側に位置する第2トレンチにおいては，第1トレンチで確認した上位の遺構面で，江戸時代に属する溝・柱穴を検出した。ただし，第2トレンチでは，本調査に備え第2遺構面まで掘削せず，第1遺構面の保護を図った。両トレンチからは，陶磁器・土師器・瓦片が出土した。

6．まとめ

確認調査を行った箇所は，高松城々内にあたることから，確認された江戸時代の遺構は，高松城に関わるものと考えられる。ちなみに，17世紀中頃と推定される高松城下図屏風では，当該地には厩らしき建物が描かれている。遺構面が2面存在することを考慮すると，少なくとも2度の造成工事が実施された可能性がある。また，今回調査できなかった中堀については，大正時代末頃に埋められており，地下に石垣が埋没していると考えられる。

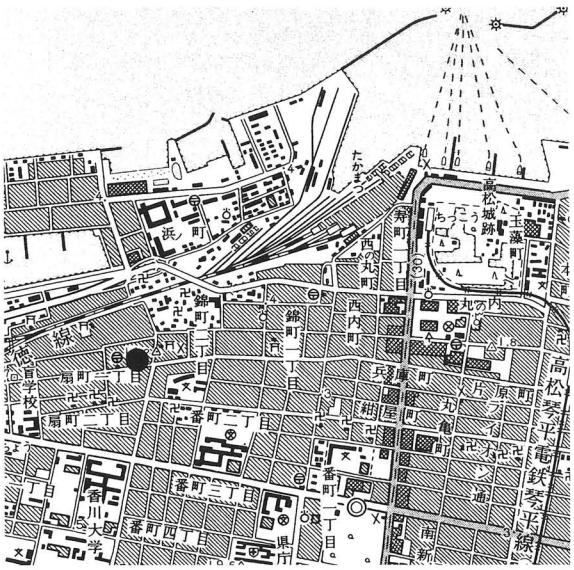
写真11　第1トレンチ（東から）

写真12　第2トレンチ全景（西から）

扇町一丁目遺跡（おうぎまちいっちょうめいせき）（都市計画道路兵庫町西通町線）

1．調　査　地　高松市扇町一丁目
2．調 査 期 間　平成13年10月11日
3．調査担当者　川畑　聰
4．調査の原因　都市計画道路兵庫町西通町線建設
5．調査結果の概要

高松市街地の西に位置し，平安～室町時代に属する浜ノ町遺跡が付近に存在する。道路拡幅工事予定地のうち既存建物が立ち退いた箇所において確認調査の実施を計画したが，予定地の大部分が生活空間として利用されていたため，支障のない1ヶ所にのみトレンチを1本設定した。



第23図　調査地位置図

江戸時代に属する第1遺構面で土坑1基を，平安時代末～室町時代に属する第2遺構面で柱穴4基を検出した。地表より約75㎝以下は砂層（第2遺構面ベース）となっており，無遺物層である。

第1遺構面で検出した土坑は，トレンチ全面に広がっており規模は確認できず，第2遺構面検出時に底のみを確認できた。この土坑からは，陶磁器・土師器・瓦片に混じって炭や焼土塊が多く出土したことから，屋敷等の火災後に掘られたゴミ捨て穴であると考えられる。

第２遺構面で検出した柱穴SP01～03は，どれも深さ約10cmと浅く，しかも砂層の上にあるため，掘削作業中に消滅しかかるほど不安定な状態であった。SP02から，室町時代の土師器小皿(第27図-1)と平安時代末期の須恵質土器碗(第27図-2)が出土した。一方，柱穴SP04は，深さが約45㎝あって，しかも江戸時代前期の擂鉢(第27図-3)が出土しており，他の柱穴と様相を異にすることから，本来第1遺構面から掘削されたが，土坑によって上部が壊されたものと考えられる。

6．まとめ

確認調査を行った箇所は，高松城下町においては常磐橋を起点に西へのびる街道筋にあたることから，第1遺構面で確認した遺構は江戸時代の町屋に伴う遺構と考えられる。一方，第2遺構面で確認した平安時代末～室町時代に属する柱穴は，集落跡が存在するものと考えられる。

写真13　トレンチ全景（西から）

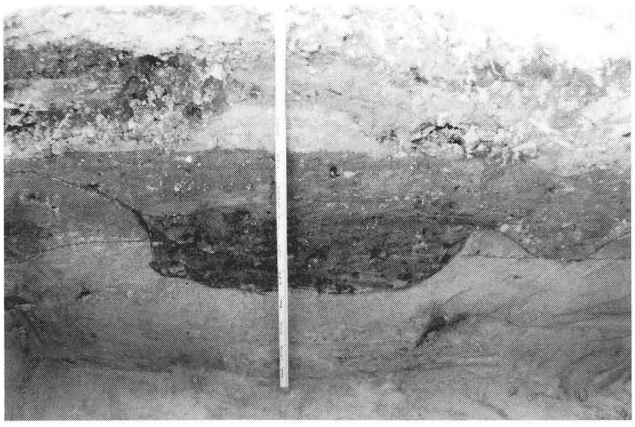
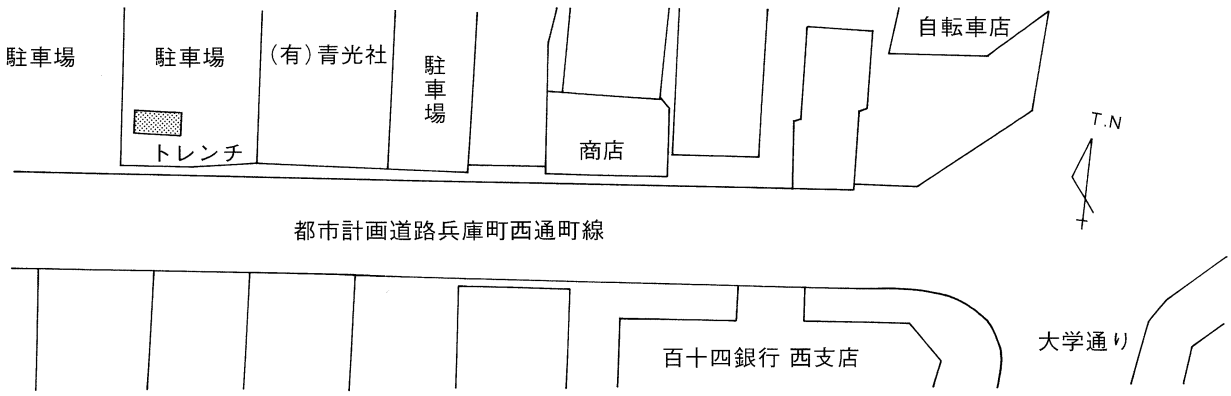
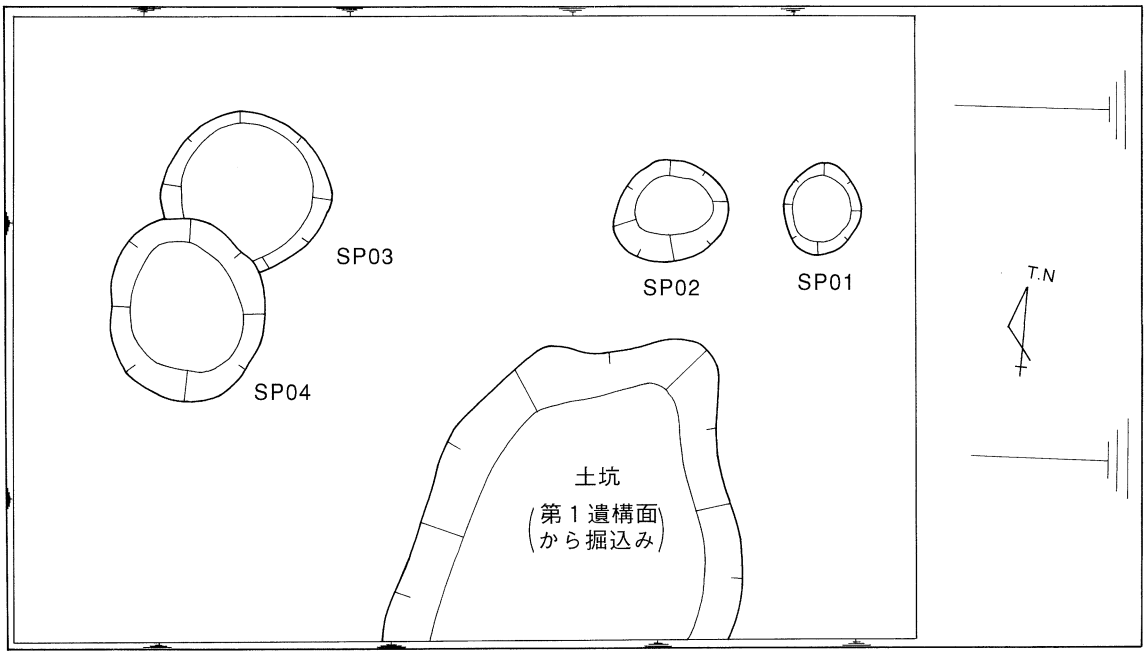


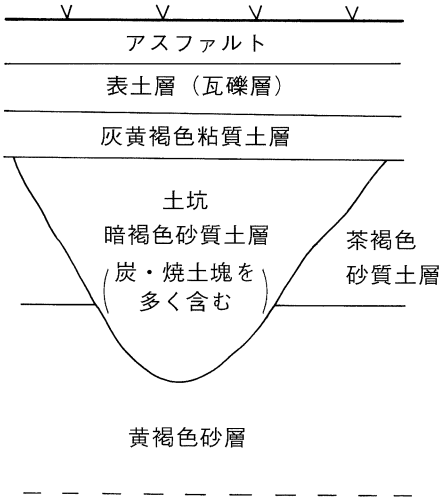
写真14　トレンチ南壁断面



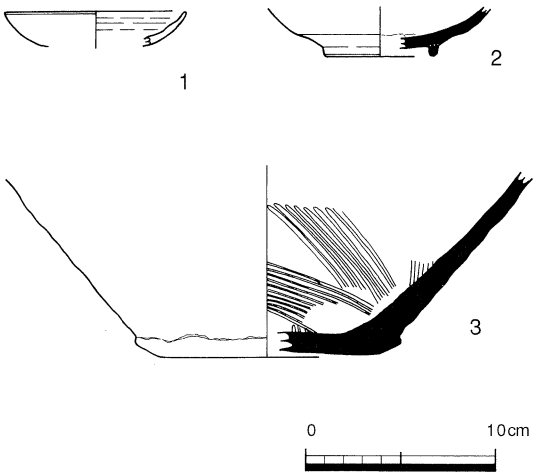
第24図 トレンチ位置図 (S=1/500)



第25図 第2遺構面遺構配置図 (S=1/20)



第26図 南壁断面略図 (縦S=1/20,横S=1/40)



第27図 出土遺物実測図 (S=1/4)

高松城跡（たかまつじょうあと）（都市計画道路高松海岸線）

1．調　査　地　高松市丸の内

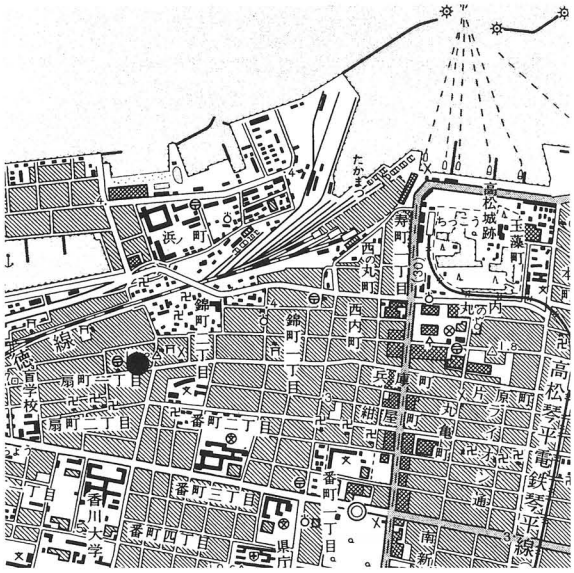
2．調 査 期 間　平成13年10月16日～19日

3．調査担当者　川畑　聰・中西克也

4．調査の原因　都市計画道路高松海岸線建設

5．調査結果の概要

高松城は，天正15年(1587)に入封した生駒親正によって翌年より築城され，寛永19年(1642)に高松藩主となった松平家が明治維新を迎えるまで居城とした。今回，調査の対象となった都市計画道路高松海岸線は，高松城を囲む三重の堀のうち，中堀の南側にあった東西街路とこれに面する屋敷地に該当する。



第28図　調査地位置図

確認調査は，道路拡幅工事予定地のうち，既存建物が立ち退いた箇所3ヶ所において実施した。南北方向のトレンチを各１本ずつ計3本設定して実施した。

最も東側に位置する第1トレンチにおいて，江戸時代に属する3面の遺構面を確認した。上から第1遺構面では土坑，第2遺構面では柱穴・溝・土坑，第3遺構面では柱穴を検出した。地表より約90㎝以下は砂層（第3遺構面のベース）となっており，無遺物層である。第2トレンチにおいても，江戸時代に属する3面の遺構面を確認した。上から第1遺構面では井戸，第２遺構面では溝・土坑，第3遺構面では土坑を検出した。第3トレンチにおいては，現代の撹乱が深く及んでおり，埋蔵文化財は確認できなかった。第1・2トレンチからは，陶磁器・土師器・瓦片が出土した。

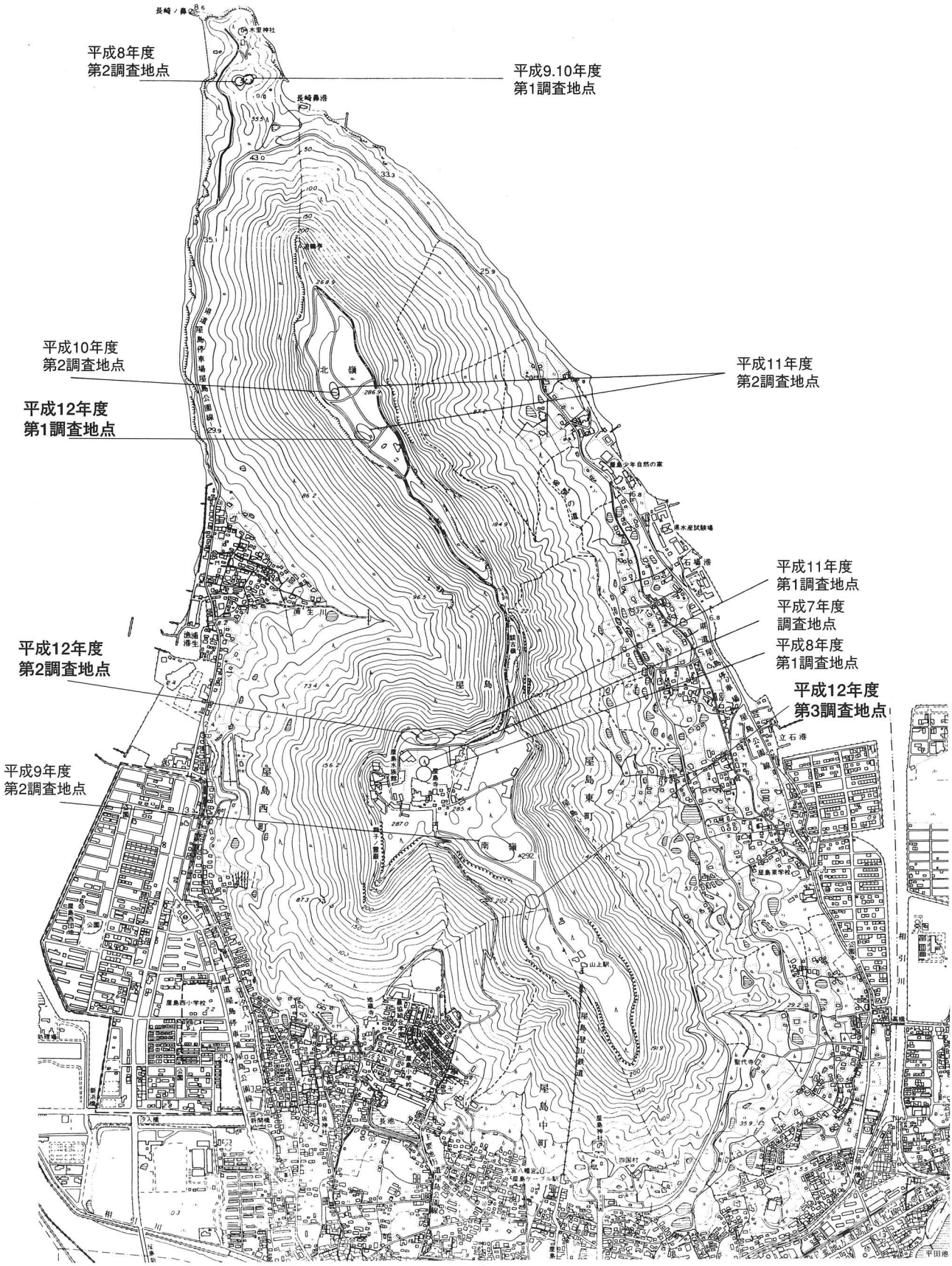
6．まとめ

確認調査を行った箇所は，高松城々内にあたることから，確認された江戸時代の遺構は，高松城に関わるものと考えられる。ちなみに，当該地は17世紀中頃と推定される高松城下図屏風を見ると規模が大きい屋敷が描かれ，幕末の絵地図を見ると小規模な屋敷地となっている。遺構面が3面存在することを考慮すると，少なくとも3度の造成工事が実施されたと考えられる。

写真15　第1トレンチ（北から）

写真16　第2トレンチ（南から）

第２章　史跡天然記念物屋島基礎調査事業



第２９図　史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査地位置図

平成12年度の発掘調査は，北嶺の第1調査地点4箇所，南嶺の第2調査地点2箇所，第3調査地点の1箇所の合計7箇所で確認調査を行った他，11年度の北嶺分布調査で礎石建物跡や集石遺構を確認したことから4月～5月に再度，北嶺の詳細な分布調査を行った。

この内，第1調査地点とした北嶺山上部では，11年度の分布調査で確認した遺構の詳細を確認する調査となり，礎石建物跡の土壇部から出土した須恵器多口瓶より寺院の一部であることが判明した。

第2，第3調査地点は屋島城に関連すると考えられる南嶺北側，西側の外郭線部分の調査を行った。

第30図　第１調査地点トレンチ配置図

1　第１調査地点（北嶺山上）

(1) 調 査 地　高松市屋島西町北嶺山上部
　　（国立公園内）

(2) 調査期間　平成12年11月21日～
　　平成13年 3月19日

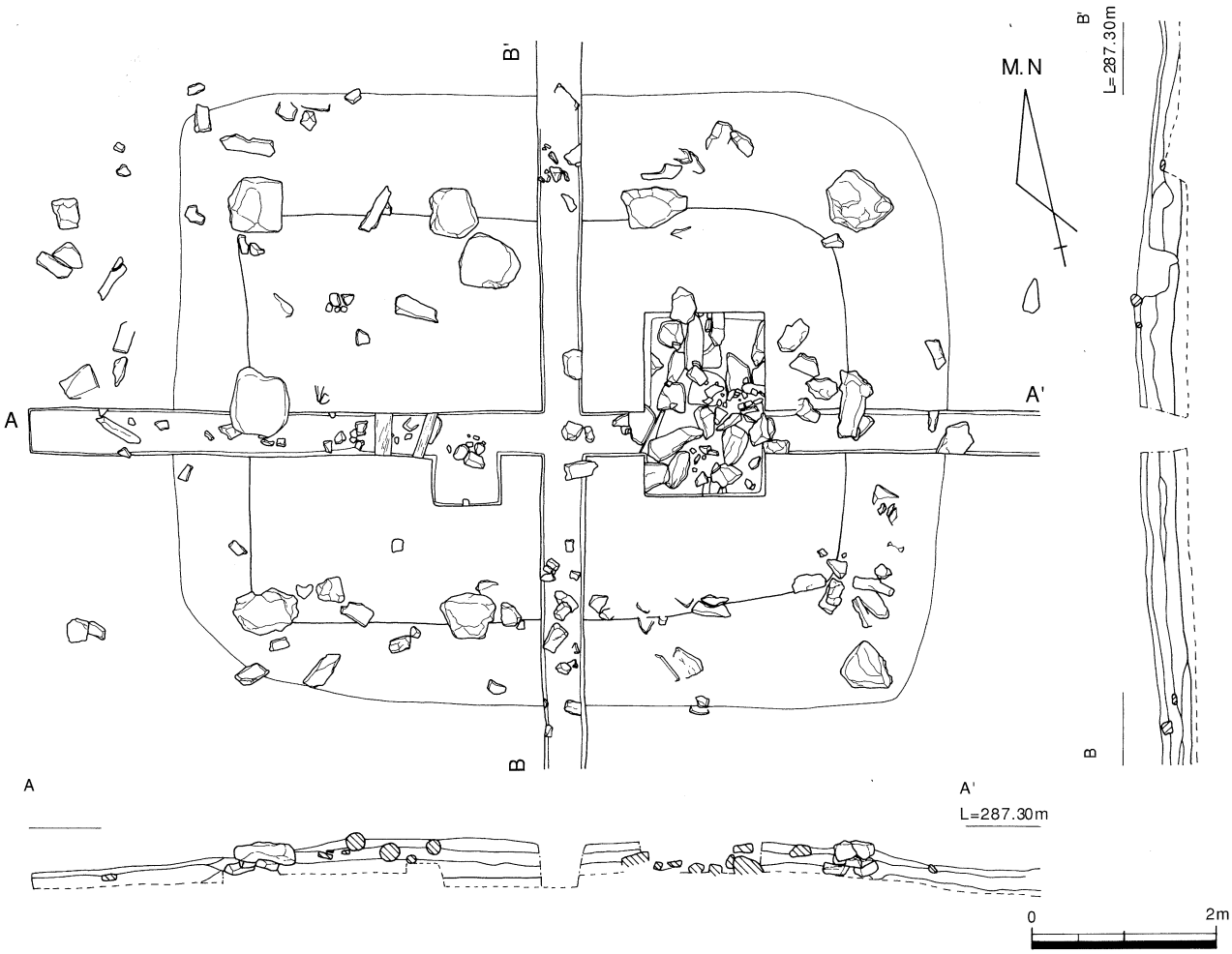
(3) 調査面積　484㎡

(4) 発掘調査の概要

北嶺山上部芝生広場の北側に4箇所のトレンチを設定し調査を行った。第1～第3トレンチを設定した箇所は平成11年度の分布調査で確認した遺構である。第4トレンチは従来から千間堂跡と呼ばれている湿地東側の平坦地に設定し，遺構の確認を行った。

第１トレンチ－礎石建物跡－

第１トレンチを設定したのは土壇をもつ東西３間×南北２間の礎石建物跡である（第31図）。礎石のうち２石は原位置を移動していたが，それ以外は原位置を保っている。礎石は周辺で採れる安山岩を使用し，礎石の規模は一辺が０.６ｍ程度であり，各礎石の柱間寸法はいずれも２.２ｍ間隔である。礎石が移動した部分の平面および断面による観察から，礎石の下には礎石が沈まないよう安山岩を置いている状況が認められた。土壇は40cmの高さをもち，東西8.40m，南北6.70mの範囲が周囲よりも高くなっている。内部状況を確認するため土壇を十字に断ち割り土層を観察したところ，版築は採用されておらず，安山岩の風化土と安山岩の小礫によって構築されていた。東西トレンチの東側において土壇上面から20～30cmの深さで安山岩の集石を確認した。集石の広がりを確認するためトレンチを拡張した結果，集石は南北2m，東西1.6mの範囲にまとまっている状況が認められた。集石の上部において須恵器多口瓶片を確認し，その後の復元作業により形態，胎土の違う3個体分に復元できた。多口瓶の県内での出土例は飯山町法勲寺で体部に突帯をもつ破片が1点出土しているのみである。県外に目をむければ，多口瓶の出土が寺院跡か仏教儀礼を執り行った宮域等に限られることから，多口瓶の確認により基壇をもつ礎石建物跡は寺の遺構の一部と考えられることができ，周辺部の平坦地には礎石は認められないこと，礎石建物跡の3間×2間の規模が仏像を建物中央に安置するのに適した間取りであることなどから，礎石建物跡の用途としては仏像を安置する仏堂の可能性が考えられる。北嶺で確認されている建物遺構は，現在のところ当該礎石建物跡のみであるが，周辺部では日常使用する土器が多く出土していることから，平成13年度は礎石建物跡の北側に広い範囲でトレンチを設定し，他の建物遺構（僧坊等）が存在するかどうか確認調査を実施している。

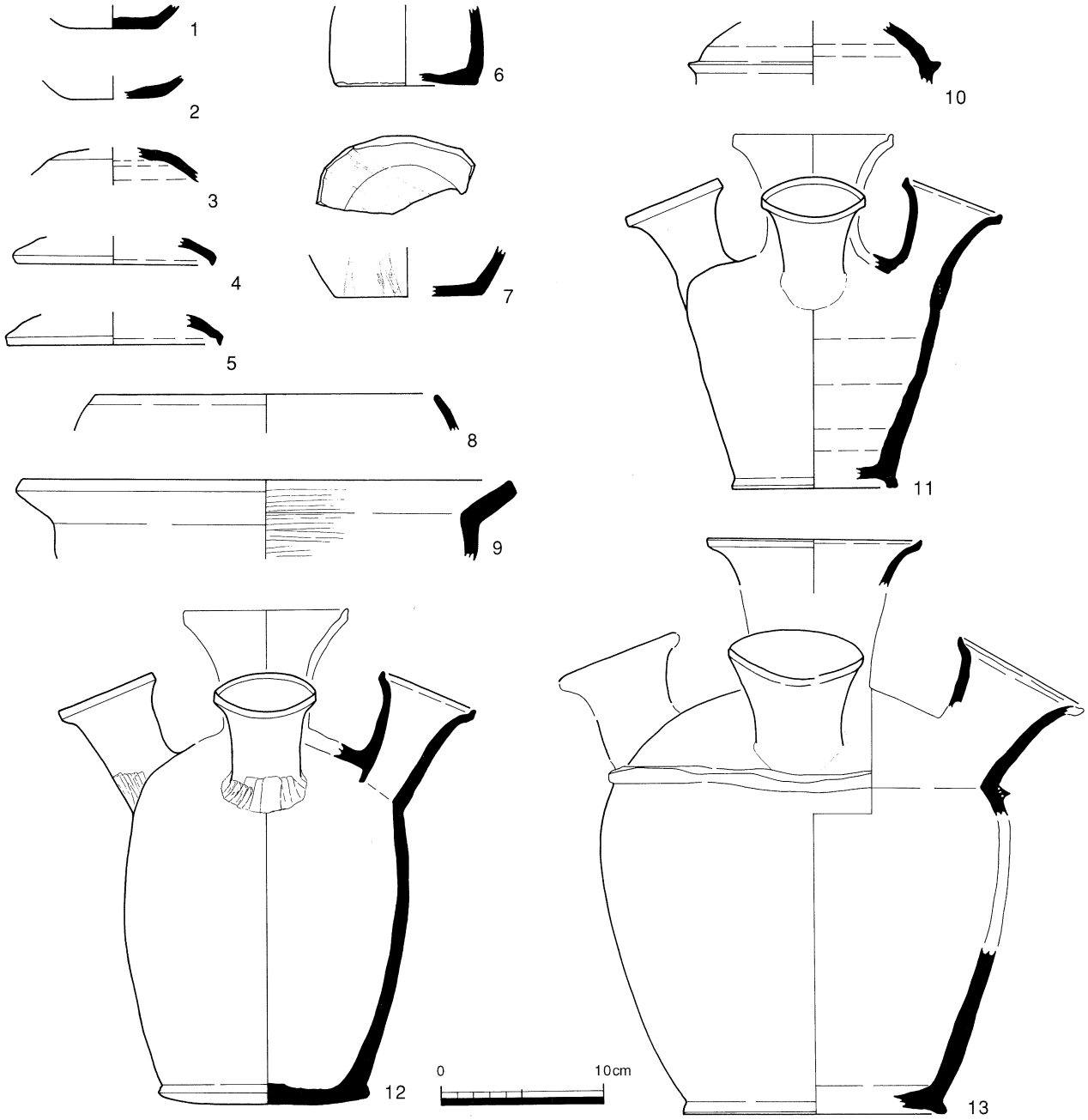


第31図 礎石建物跡平面・土層断面図（S=1/80）

礎石建物跡の土壇からは須恵器，土師器が出土している（第32図）が，この内，注目できる遺物は，11～13の須恵器多口瓶である。いずれの多口瓶も注口部が斜め上方に開く形態をとるもので，器形にバリエーションが認められる。11は，出土した多口瓶の内，最も小ぶりなもので，底部はしっかりとした高台がつく。焼成は3個体のうち，最も良好である。12は，13よりやや小ぶりで，細身の形態をとり，底部は平底である。注口の接合部分は箆ナデの痕跡が顕著である。13は，最も大きなもので，体部上半に1条の突帯を巡らす。底部は退化した高台が認められる。10は，体部上半の破片であり，13と同様に1条の突帯が認められることから多口瓶の破片である可能性が考えられる。

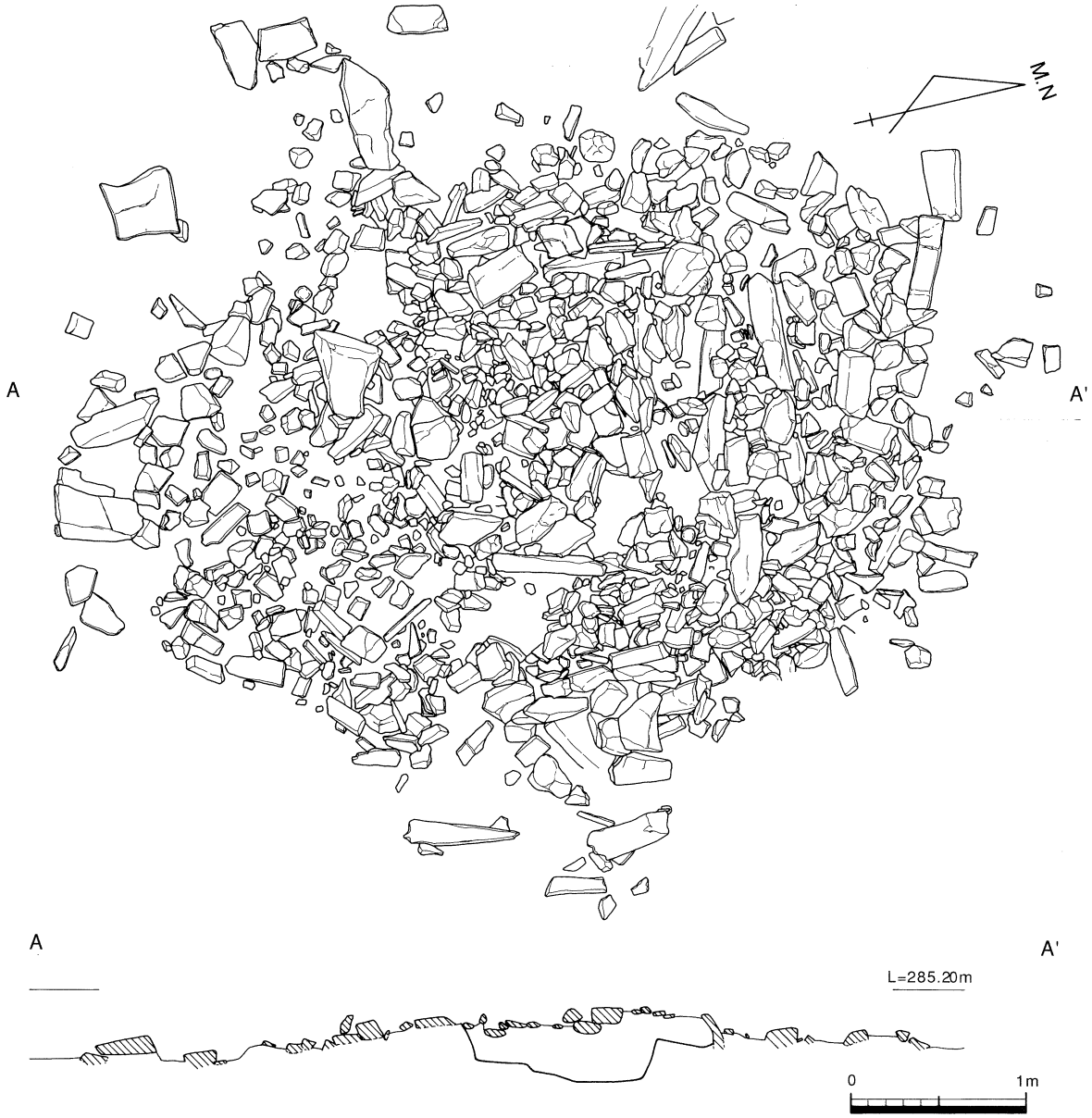
第２トレンチ－集石遺構（火葬墓）－

落葉を除去した段階で安山岩の集石の中央部において，南側を除く部分で板石によって区画されている状況が認められた（第33図）。精査の結果，東側の区画石は下部が安定していないことから移動していることが判明した。東側，南側の状況が不明であるが，一辺が約2m程度に方形に区画されていたものと考えられる。北側の区画石の外側にも板石列が認められる。板石と板石の間には小振りの安山岩が充填されている。周辺にも区画石と考えられる板石が散乱していることから，本来は2～3重に区画されていたものと考えられる。集石の下部について内部状況を確認するため集石東側の安山岩を除去したところ，下から南北75cm，東西60cm以上の規模をもつ土坑を確認した。土坑の上層から土師器杯が出土した以外，その他の遺物は認められなかった。同様な方形の集石遺構は豊浜町大木塚でも確認され（注１），集石下では土坑も確認されている。豊浜町大木塚は，蔵骨器，人骨の出土はないが，副葬品と考えられる完形の青磁碗，白磁皿が出土していることなどから火葬墓であると考えられている。



第32図 礎石建物跡（土壇中）出土遺物実測図（S=1/4）

大木塚と比べると，集石の上面状況，規模，集石下で確認した土坑等共通する部分が多いことから，北嶺山上で確認し集石遺構も火葬墓であると考えられる。火葬墓の根拠として焼土，炭，人骨，副葬品等の出土が挙げられるが，当遺跡からは出土していない。考えられる原因として集石遺構の区画石の東側，南側が大きく乱れていることから盗掘（改葬）にあった可能性も考えられる。また，別の場所で火葬され，人骨だけがこの場所に埋葬されたことも想定されるし，人骨が出土しないのは長年の雨水等により人骨が溶け出している可能性も想定される。集石中からは灰釉陶器や土師器土釜，須恵質土器杯など10世紀を中心とする遺物が多量に出土しているが，10世紀代の火葬墓の類例は現在のところ京周辺域でしか確認されていない状況を考えると，集石を構築する際に周辺から集められてきた土に包含されていたものが移動してきたものであり，遺構の本来の構築時期を決定するものではないと考えられる。出土遺物の中に12世紀後半頃と考えられる瓦器碗の破片や高台の退化した土師器碗などの後出する土器が若干出土している。これらの遺物の年代より12世紀後半から13世紀初頭の遺構と考えるのが妥当であろう。



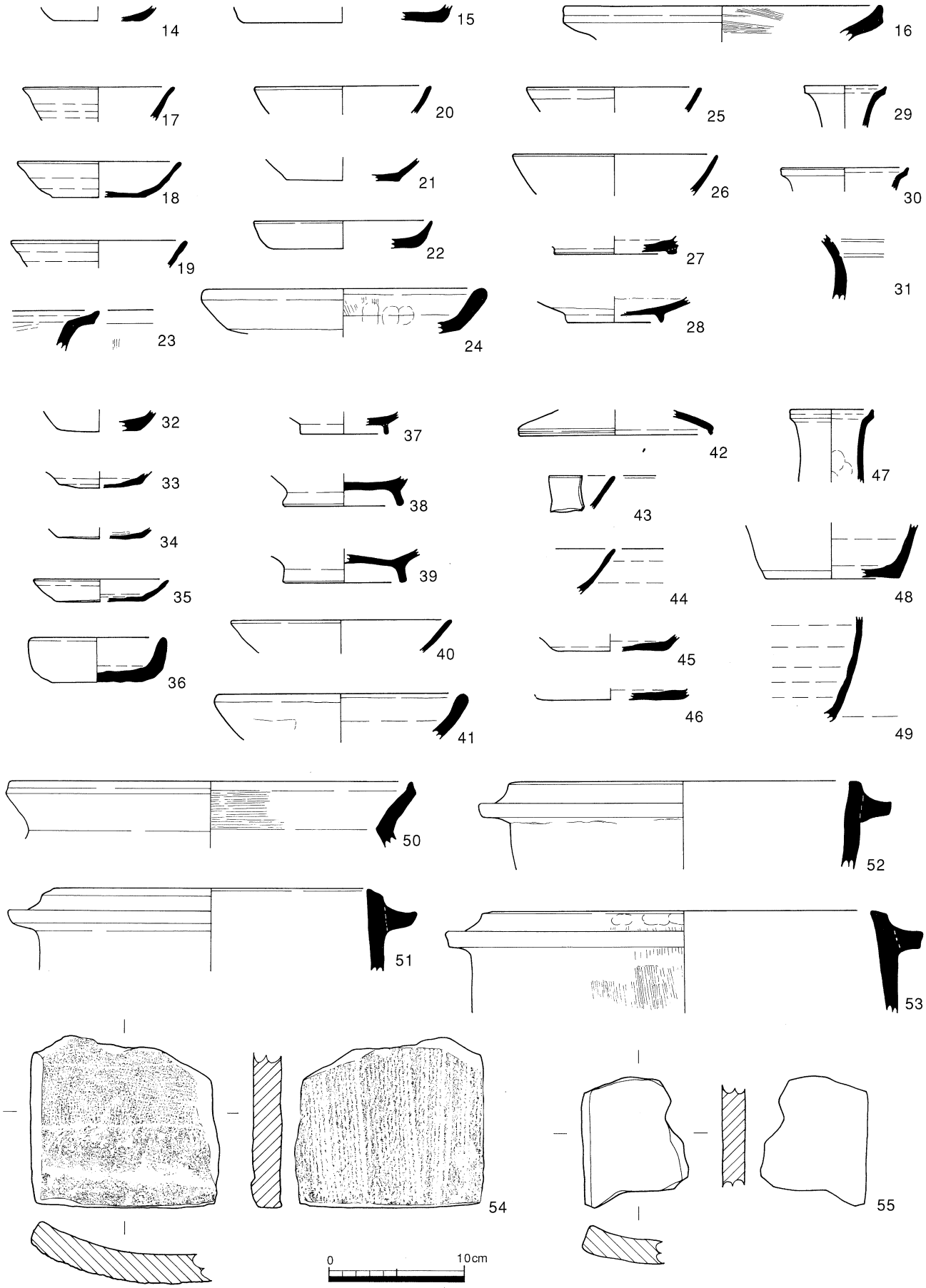
第33図 集石遺構（火葬墓）平面・土層断面図（S=1/40）

火葬墓からは集石を中心に多くの遺物が出土した（第34図）が，火葬墓の時期を特定する遺物は少ない。28の灰釉陶器皿や50～53の土師器煮炊具，54,55の平瓦など多くの遺物は，礎石建物跡を含めた寺院に関連遺物と考えられる。

第3トレンチ ー長方形石積み基壇ー

礎石建物跡の北方約90mにおいて東西10m，南北2m，高さ0.4mの長方形に安山岩を積んだ基壇を確認した。基壇はすべて石積みで主軸をほぼ東西に向けており，現在確認されている規模で完結し，東西には広がらない。内部状況を確認するため基壇に直行するトレンチを設定した結果，外側に安山岩を3段積み上げ，その内側は土と安山岩で充填し，上面を安山岩で覆っている状況が確認できた。

遺構の性格としては，石積みの幅の状況から建物遺構の基壇とは考えにくく，基壇の主軸が東西方向を向くことから境界石（傍示石）としての可能性も考えられるが，他の類例と比べ規模が大きすぎるようである。築造当初は基壇上部に石仏などの石造物が置かれていたが，後に他の場所に移動した可能性も考えられる。トレンチ内からは土師器竈の鍔部分が出土したが，細かな時期の特定はできなかった。



第34図 集石遺構（火葬墓）出土遺物実測図（S=1/4）

2 第2調査地点（南嶺北斜面）

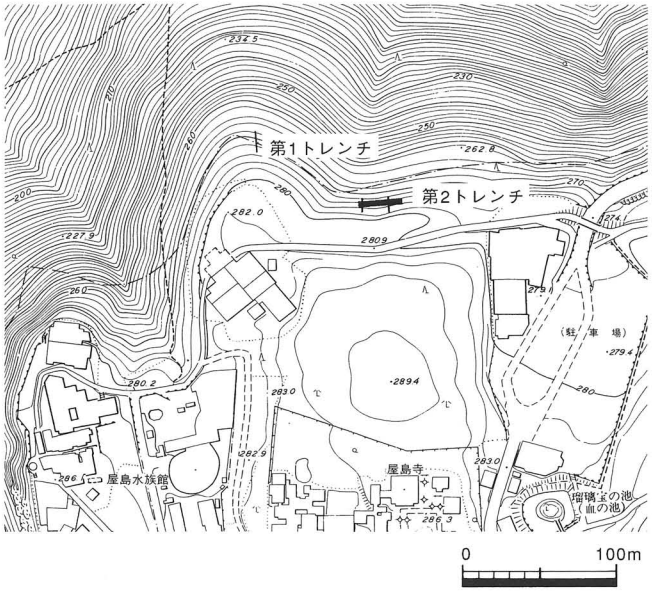
(1) 調 査 地　高松市屋島東町1821－1，
　　屋島国有林26林班い4小班

(2) 調査期間　平成13年1月16日～
　　平成13年3月21日

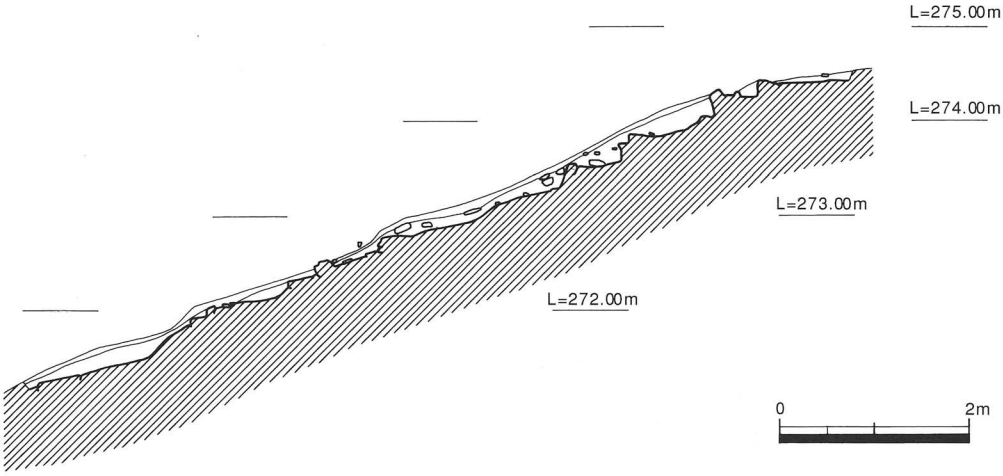
(3) 調査面積　107.5㎡

(4) 発掘調査の概要

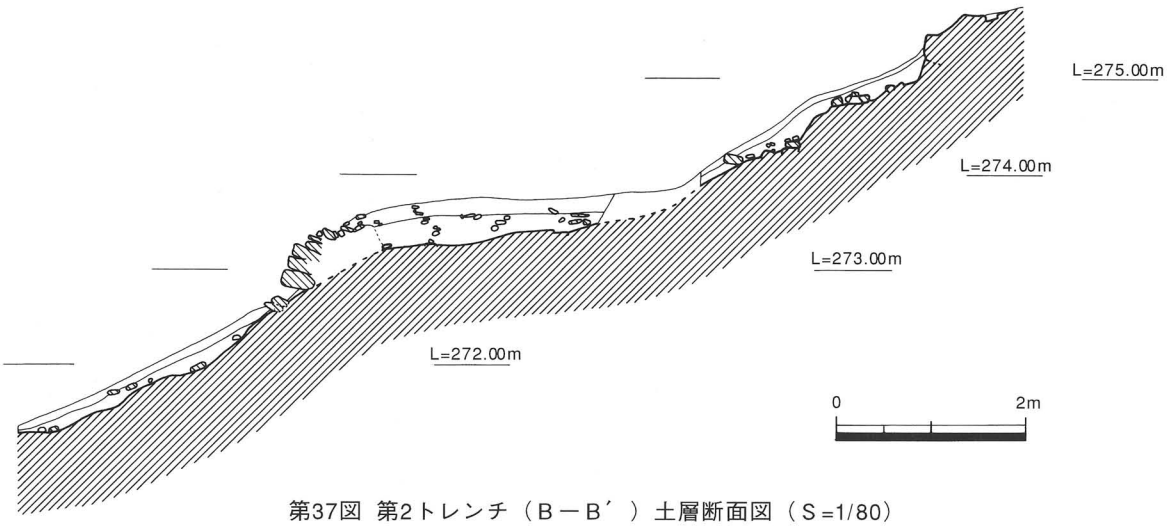
屋島城の北側外郭線にあたると考えられ，大阪大学　村田修三氏が昭和59年に確認した屋島城関係遺構のうち，南嶺北側のA地点としている部分にあたる(注2)。遺構は，地形が緩斜面から急斜面に変化する標高274～271mにおいて，幅2～3mの帯状の平坦地が延長約200mにわたり存在する。遺構の大半は土塁であるが，標高の最も高い部分の斜面には長さ25m，高さ1mの石塁が存在する。石塁に使用している石の規模は大小さまざまで，



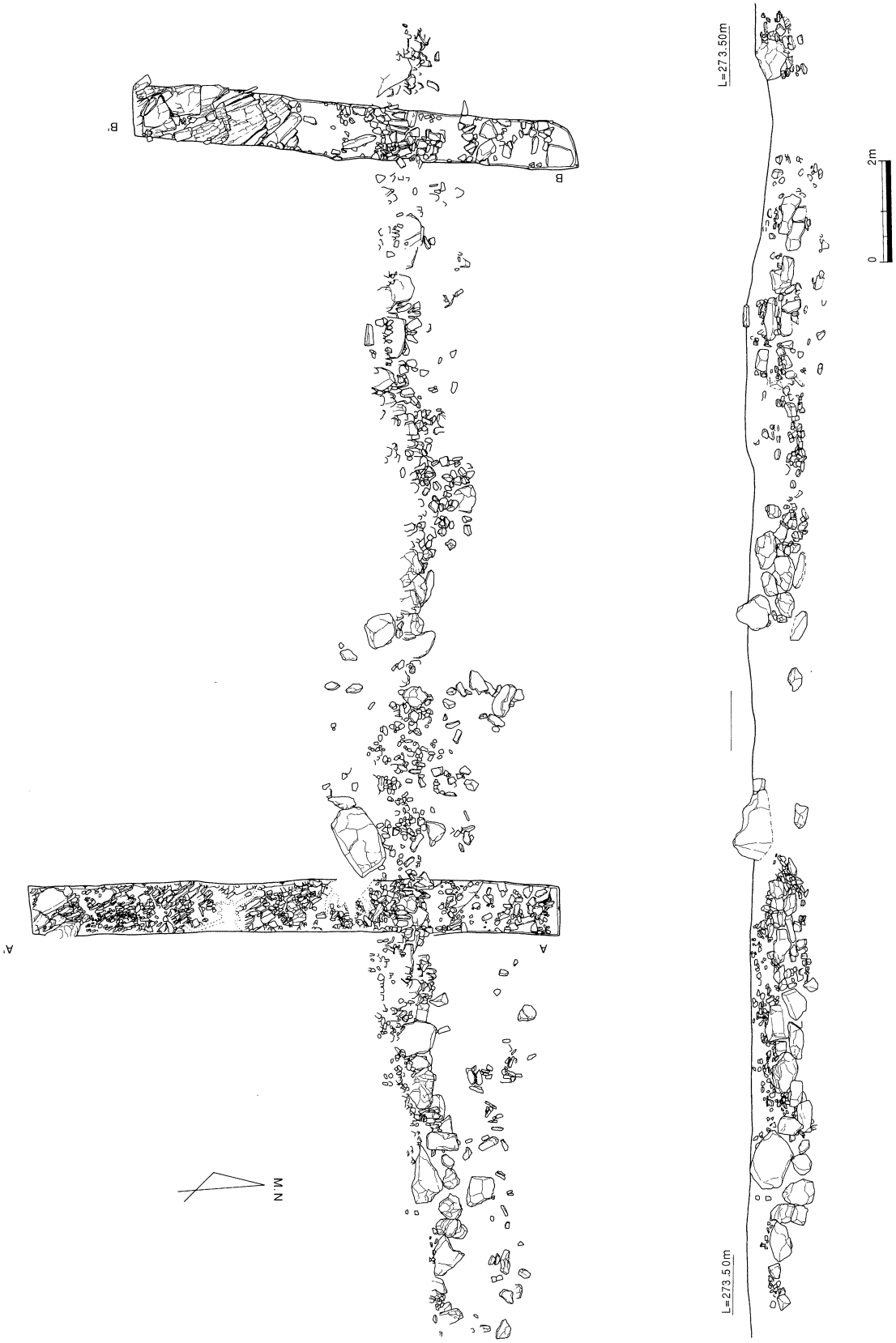
第35図 第2調査地点トレンチ配置図



第36図 第2トレンチ（A－A′）土層断面図（S=1/80）



第37図 第2トレンチ（B－B′）土層断面図（S=1/80）



第38図　第2トレンチ平・立面図

第39図 第1トレンチ平面・土層断面図（S=1/80）

自然の露岩をも取り込む形で石塁を構築している。平成11年度に2箇所トレンチを設定し内部状況を確認した結果，土塁を構築する際に版築を行っていないことが判明した。

12年度は石塁の裏側について土塁の構築状況を確認する為のトレンチを設定した（第36～38図－第2トレンチ－）。トレンチによる土層観察では，土塁上部平坦面から安山岩の岩盤までの深さは50cmであり，土塁平坦部の下部は上面と同様に安山岩の岩盤をカットしている状況が認められる。石塁は岩盤をカットした平坦部よりやや下がった部分から築いており，現存での高さは70cmである。第2トレンチで確認した石塁に使用している石材の奥行きは30～40cmあり，石塁の裏側は幅50cmの範囲で安山岩小礫による裏込めが認められた。その裏側は安山岩の小礫と安山岩の風化土が混在して埋められている状況が確認できたが，これまでと同様に版築技法は認められなかった。なお，尾根先端部に設

定した第1トレンチ（第39図）についても同様の土層状況であった。これまで北斜面において合計5箇所にトレンチを設定し調査を行ったが，いずれのトレンチにおいても版築は認められなかったことから，少なくとも南嶺北側斜面の土塁については版築を採用せずに構築されていることが判明した。

3 第3調査地点（南嶺西斜面）

(1) 調 査 地　高松市屋島東町1782－1

(2) 調査期間　平成13年2月5日～平成13年3月7日

(3) 調査面積　8.5㎡

(4) 発掘調査の概要

屋島城の西側外郭線にあたると考えられる。北側外郭線と同様に地形が緩斜面から急斜面に変化する標高273m付近において平坦地とその斜面部に石塁が存在する。外郭線の北端部分に幅15mの窪みが存在し，この前面には石塁が認められないことから，城門を推定している場所である(注3)。一部トレンチ調査を行い石垣状のものを確認したが，調査期間の関係とトレンチの範囲が狭かったこともあり，性格を把握するには至らなかった。当調査地点については，引き続き平成13年度も調査を実施している。

注(1) 豊浜町教育委員会『大木塚遺跡調査概報』１９８５年

注(2) 村田 修三「研究室こぼれ話―屋島城―」『寧楽史苑』第30号 奈良女子大学史学会 １９８５年

注(3) 平岡 岩夫「屋嶋城跡の新発見の石塁について」『コル』第7号 古代山城研究会 １９９８年

写真17　第1調査地点礎石建物跡完掘状況

写真18　礎石建物跡細部状況

写真19　集石遺溝（火葬墓）半裁状況

写真20　集石下部土坑検出状況

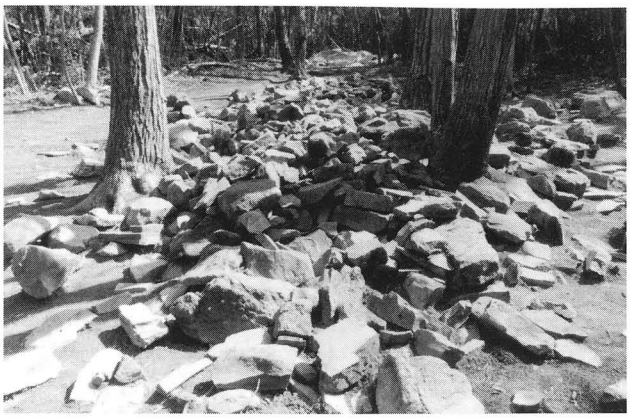


写真21　長方形石積み基壇検出状況

写真22　長方形石積み基壇細部状況

写真23　第2調査地点第1トレンチ完掘状況

写真24　第2調査地点第2トレンチ遠景

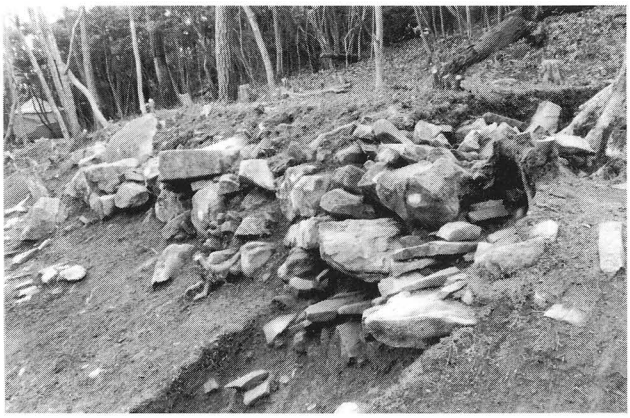


写真25　第2調査地点第2トレンチ石塁状況

写真26　第2調査地点第2トレンチ裏込状況

写真27　第2トレンチ（東）上部完掘状況

写真28　第2トレンチ（西）完掘状況

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	高松市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成13年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第59集
編集者名	山元 敏裕
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087（839）2636
発行年月日	平成14年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古宮古墳（ふるみやこふん）	高松市鬼無町（たかまつしきなしちょう）山口（やまぐち）	37201		34°19′18″	133°58′57″	H13.2.8～H13.2.14	27㎡	擁壁設置
北山浦遺跡（きたやまうらいせき）	高松市西春日町（たかまつしにしかすがちょう）北山浦（きたやまうら）	37201		34°19′10″	134°02′00″	H13.3.5～H13.3.12	280㎡	道路建設
北野遺跡（きたのいせき）	高松市三谷町（たかまつしみたにちょう）北野（きたの）	37201		34°16′53″	134°04′36″	H13.9.12～H13.9.19	36.15㎡	個人住宅
高松城跡（たかまつじょうあと）（高松駅南線）	高松市寿町（たかまつしことぶきちょう）一丁目（いっちょうめ）	37201		34°20′45″	134°03′00″	H13.10.9～H13.10.10	54㎡	道路建設
扇町一丁目遺跡（おうぎまちいっちょうめいせき）	高松市扇町（たかまつしおうぎまち）一丁目（いっちょうめ）	37201		34°20′35″	134°02′30″	H13.10.11～H13.10.11	5㎡	道路建設
高松城跡（たかまつじょうあと）（高松海岸線）	高松市丸ノ内（たかまつしまるのうち）	37201		34°20′41″	134°03′15″	H13.10.16～H13.10.19	33㎡	道路建設
史跡天然記念物（しせきてんねんきねんぶつ）屋島第１調査地点（やしまだいいちちょうさちてん）	高松市屋島西町（たかまつしやしまにしまち）北嶺山上部（ほくれいさんじょうぶ）	37201		34°22′00″	134°06′09″	H12.11.16～H13. 3 .16	484㎡	基礎調査
史跡天然記念物（しせきてんねんきねんぶつ）屋島第2調査地点（やしまだいにちょうさちてん）	高松市屋島東町（たかまつしやしまひがしまち）	37201		34°21′24″	134°06′15″	H13.1.16～H13.3.21	107.5㎡	基礎調査
史跡天然記念物（しせきてんねんきねんぶつ）屋島第3調査地点（やしまだいさんちょうさちてん）	高松市屋島東町（たかまつしやしまひがしまち）	37201		34°21′04″	134°06′04″	H13.2.5～H13.3.7	8.5㎡	基礎調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古宮古墳	古墳	古墳	墓道	ガラス丸玉，弥生土器	
北山浦遺跡	集落	弥生	柱穴，土坑	弥生土器，石器，須恵器	
北野遺跡	集落	弥生	溝，柱穴	弥生土器，石器	
高松城跡（高松駅南線）	城館	江戸	溝，柱穴	陶磁器，土師器，瓦	
扇町一丁目遺跡	集落	中世	土坑，柱穴	陶磁器，土師器，瓦	
高松城跡（高松海岸線）	城館	江戸	土坑，柱穴，溝	陶磁器，土師器，瓦	
史跡天然記念物屋島第1調査地点	寺院	古代 中世	礎石建物跡， 火葬墓	須恵器，土師器，灰釉陶器， 瓦器	須恵器多口瓶
史跡天然記念物屋島第2調査地点	城館	古代	土墨，石墨	弥生土器	
史跡天然記念物屋島第3調査地点	城館	古代	石垣状遺構		

高松市内遺跡発掘調査概報

―平成13年度国庫補助事業―

平成14年3月29日発行

編　集　高松市教育委員会

発　行　高松市番町一丁目8番15号

印　刷　有限会社　中央ファイリング